

朝
日
の
遺
跡
IV

君迫遺跡・山ノ神（二串）遺跡

日田市埋蔵文化財調査報告書第125集

2017年

日田市教育委員会

朝日の遺跡IV

— 県営経営体育成基盤整備事業朝日地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（4） —

君迫遺跡・山ノ神（二串）遺跡の調査



日 田 市



2017年

日田市教育委員会



君迫遺跡調査地周辺空中写真（北東から）



君迫遺跡調査区全体写真（南東から）



山ノ神（二串）遺跡調査地周辺空中写真（南東から）



山ノ神（二串）遺跡 5 号土坑遺物出土状況

序 文

この報告書は、当委員会が平成 25・26 年度に県営経営体育成基盤整備事業朝日地区の君迫工区・二串工区の工事実施（圃場整備）に伴い、発掘調査を行った君迫遺跡・山ノ神（二串）遺跡の調査内容をまとめたものです。

このうち、山ノ神（二串）遺跡の調査では、弥生時代中期以降に水路として利用されたと考えられる溝が見つかり、二串川沿いに集落と溝や水田が広がる、現在とほぼ同じ景観であったことがわかりました。

今回の報告で、朝日地区で行われてきた圃場整備に伴う発掘調査の報告は全て終了します。本報告に加え、これまでに報告してきた発掘調査の成果と合わせて、文化財の保護、地元朝日地区の歴史解明や学術研究にご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、調査に際してご協力いただきました、地元の方々や朝日地区圃場整備組合をはじめとする全ての方々へ心よりお礼申し上げます。

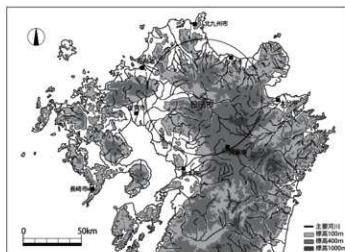
平成 29 年 2 月

日田市教育委員会

教育長 三苫 眞治郎

例 言

1. 本書は日田市教育委員会が平成25・26年度に実施した君迫遺跡・山ノ神（二串）遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は県営経営体育成基盤整備事業朝日地区君迫工区（平成25年度）・二串工区（平成26年度）の工事実施に伴い、大分県西部振興局の委託業務として日田市が受託し、日田市教育委員会が事業主体となり実施した。
3. 調査に当たっては、朝日地区圃場整備組合、柳松岡ガーデン、市農業振興課にご協力いただいた。
4. 発掘調査は若杉が担当した。
5. 君迫遺跡の発掘調査は、遺構配置図（全体図）作成・メッシュ杭設置・平面遺構実測・個別遺構実測・土層実測及び空中写真撮影を発掘調査補助業務として、株式会社埋蔵文化財サポートシステムに委託して実施した。
6. 山ノ神（二串）遺跡の発掘調査は、表土剥ぎ・遺構検出を除く、現場管理・遺構掘り下げ・地形測量・メッシュ杭設置・平面遺構実測・個別遺構実測・土層実測・遺構写真撮影・合成図作成及び空中写真撮影を発掘調査支援業務として、有限会社九州文化財リサーチに委託して実施した。
7. 君迫遺跡の遺構写真撮影は担当者が行った。
8. 君迫遺跡の遺構製図は株式会社イビソク大分営業所、山ノ神（二串）遺跡の遺構製図は有限会社九州文化財リサーチに委託し、その成果品を使用した。
9. 君迫遺跡・山ノ神（二串）遺跡の出土遺物実測・製図・写真撮影及び割付は雅企画有限会社に委託し、その成果品を使用した。
10. 山ノ神（二串）遺跡出土の木材については、樹種同定・放射性炭素年代測定を株式会社パレオ・ラボに委託し、その成果を第5章に掲載した。
11. 本報告書の作成に当たり、原稿の一部（第3章（2）・第4章（2））及び割付・編集作業を報告書原稿作成業務として、有限会社九州文化財リサーチに委託した。
12. 挿図中の方位、文中の方位角は真北を示す。
13. 写真図版の遺物に付した番号は、実測図番号に対応する。
14. 出土遺物及び図面・写真類は、日田市埋蔵文化財センターにて保管している。
15. 本書の執筆は、第3章（2）・第4章（2）及び第6章を除き、若杉が行い、全体の編集は若杉が行った。



日田市の位置



大分県の行政地区

本文目次

第1章 調査の経過	
(1) 調査に至る経緯	1
(2) 発掘作業の経過	5
(3) 整理等作業の経過	5
第2章 遺跡の位置と環境	6
第3章 君迫遺跡の調査	8
(1) 調査の概要	8
(2) 遺構と遺物	9
第4章 山ノ神(二串)遺跡の調査	13
(1) 調査の概要	13
(2) 遺構と遺物	13
第5章 自然科学分析	30
(1) 樹種同定	30
(2) 放射性炭素年代測定	33
第6章 総括	36

挿図目次

第1図 工事实施区域と調査区位置図(1/10,000) .. 2	第15図 5号土坑及び出土遺物実測図(1/30・1/4)・14
第2図 君迫遺跡及び山ノ神(二串)遺跡周辺 地形図(1/2,500) .. 3	第16図 1号溝状遺構実測図(1/250) .. 16
第3図 周辺遺跡分布図(1/25,000) .. 7	第17図 1号溝状遺構土層実測図(1/40) .. 17
第4図 遺構配置図(1/300) .. 8	第18図 1号溝状遺構出土遺物実測図(1)(1/4) .. 19
第5図 中央落ち込み部分土層実測図(1/40) .. 8	第19図 1号溝状遺構出土遺物実測図(2)(1/4) .. 20
第6図 2号掘立柱建物実測図(1/60) .. 9	第20図 1号溝状遺構出土遺物実測図(3)(1/3・1/4) 21
第7図 3号掘立柱建物実測図(1/60) .. 10	第21図 1号溝状遺構出土遺物実測図(4)(2/3・1/2) 22
第8図 5号掘立柱建物実測図(1/60) .. 10	第22図 1号溝状遺構出土遺物実測図(5)(2/3・1/2) 23
第9図 6号掘立柱建物実測図(1/60) .. 11	第23図 1号溝状遺構出土遺物実測図(6)(1/2) .. 24
第10図 土坑実測図(1/30) .. 11	第24図 2号溝状遺構実測図(1/150・土層1/40) 26
第11図 溝状遺構実測図(1/60・土層1/40) .. 12	第25図 2号溝状遺構出土遺物実測図(2/3・1/2・1/4) .. 27
第12図 出土遺物実測図(1/3・2/3) .. 12	第26図 1・2号溝状遺構出土遺物実測図(1/4) .. 27
第13図 遺構配置図(1/500) .. 13	第27図 3・4号溝状遺構実測図(1/150・土層1/40) 28
第14図 2号土坑実測図(1/30・土層1/40) .. 14	第28図 その他の出土遺物実測図(1/2・1/3・1/4) 29
	第29図 暦年較正結果 .. 35

表目次

第1表 県営経営体育成基盤整備事業朝日地区に 伴う調査一覧 .. 2	第4表 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果 .. 34
第2表 樹種同定結果 .. 30	第5表 出土遺物観察表(1) .. 38
第3表 測定試料及び処理 .. 33	第6表 出土遺物観察表(2) .. 39
	第7表 出土遺物観察表(3) .. 40

写真図版目次

巻頭写真図版1

- 上 君迫遺跡調査地周辺空中写真(北東から)
- 下 君迫遺跡調査区全体写真(南東から)

巻頭写真図版2

- 上 山ノ神(二串)遺跡調査地周辺空中写真(南東から)
- 下 山ノ神(二串)遺跡5号土坑遺物出土状況

君迫遺跡

写真図版1

- ①調査地周辺空中写真(南から)
- ②中央落ち込み部分発掘状況(北西から)
- ③中央落ち込み部分発掘状況(北から)
- ④中央落ち込み部分土層堆積状況(南側)
- ⑤中央落ち込み部分土層堆積状況(北側)

写真図版2

- ①2号掘立柱建物発掘状況(北東から)
- ②3号掘立柱建物発掘状況(北東から)
- ③5号掘立柱建物発掘状況(北東から)
- ④6号掘立柱建物発掘状況(北東から)
- ⑤土坑発掘状況(南から)
- ⑥1号溝状遺構発掘状況(北西から)

写真図版3

- 上左 3号溝状遺構発掘状況(南東から)
- 上右 4号溝状遺構発掘状況(北東から)
- 出土遺物

山ノ神(二串)遺跡

写真図版4

- 上 調査区全体写真(北東から)
- 下 調査区垂直写真(上から)

写真図版5

- ①2号土坑完掘状況(北東から)
- ②5号土坑完掘状況(北東から)
- ③5号土坑土層堆積状況(南側)
- ④5号土坑遺物出土状況(北東から)
- ⑤1・2号溝状遺構完掘状況(北から)

写真図版6

- ①1号溝状遺構(南側)完掘状況(北から)
- ②1号溝状遺構発掘状況(南東から)
- ③1号溝状遺構発掘状況(北東から)
- ④1号溝状遺構遺物出土状況①(土層③付近)(南から)
- ⑤1号溝状遺構遺物出土状況②(土層⑥付近)(北から)
- ⑥1号溝状遺構杭痕検出状況①(東から)
- ⑦1号溝状遺構杭痕検出状況②

写真図版7

- ①1号溝状遺構土層①堆積状況(南側)
- ②1号溝状遺構土層②堆積状況(南側)
- ③1号溝状遺構土層④堆積状況(南側)
- ④1号溝状遺構土層⑤堆積状況(南側)
- ⑤1号溝状遺構土層⑥堆積状況(南側)
- ⑥1号溝状遺構土層⑦堆積状況(南側)
- ⑦1号溝状遺構土層⑧堆積状況(北側)
- ⑧1号溝状遺構土層⑨堆積状況(北側)
- ⑨1号溝状遺構土層⑩堆積状況(北側)
- ⑩2号溝状遺構 AB 完掘状況(北から)
- ⑪2号溝状遺構 A 土層①堆積状況(南側)
- ⑫2号溝状遺構 A 土層②堆積状況(南側)

写真図版8

- ①2号溝状遺構 B 土層①堆積状況(南側)
- ②2号溝状遺構 B 土層②堆積状況(南側)
- ③2号溝状遺構 AB 土層④堆積状況(南側)
- ④2号溝状遺構 BC 土層⑤堆積状況(北側)
- ⑤3号溝状遺構完掘状況(南東から)
- ⑥3号溝状遺構土層堆積状況(南側)
- ⑦4号溝状遺構完掘状況(東から)
- ⑧4号溝状遺構土層堆積状況(東側)

写真図版9～14

出土遺物

本文写真目次

写真1 君迫遺跡作業風景	1	写真3 山ノ神(二串)遺跡現地説明会風景	5
写真2 山ノ神(二串)遺跡作業風景	1	写真4 山ノ神(二串)遺構出土材の光学顕微鏡写真	32

第1章 調査の経過

(1) 調査に至る経緯

県営経営体育成基盤整備事業（担い手育成型）朝日地区（主管部署：大分県西部振興局農林基盤部、以下、県振興局）の事業の全体概要や埋蔵文化財調査に至る経緯に関しては、『朝日の遺跡Ⅰ』で述べていることから、ここでは、君迫遺跡（君迫工区）、山ノ神（二串）遺跡（二串工区）の発掘調査に至る経緯を記述する。

君迫工区については、一部が周知の埋蔵文化財包蔵地（君迫遺跡）に該当しており、平成23年度に大分県教育庁文化課（以下、県文化課）が実施した農林業関係事業実施予定地の分布調査の結果、包蔵地外も含めて、予備調査が必要と判断された。

これを受け、日田市教育庁文化財保護課（以下、市文化財保護課）では、県振興局より依頼を受け、予備調査を実施することとなった。調査は休耕期の平成25年3月11～15日にかけて実施した。工事対象面積76,000㎡のうち、基本的に工事により掘削を受ける水田を対象に調査を行い、トレンチ13ヶ所（調査面積約219㎡）のうち、遺構・遺物とも確認されたトレンチは1ヶ所のみであった。このトレンチを設定した箇所は周知の埋蔵文化財包蔵地外であったことから、君迫遺跡の範囲変更の手続きを行い、県振興局に結果を報告した。それと同時に工法変更による遺跡の保存について、協議を行ったものの、変更は不可能であったことから、発掘調査を実施することになった。協議の結果、工法変更が行われたことから、最終的に対象としたのは、約700㎡となった。

その後、平成25年4月8日付けで文化財保護法第94条の通知を大分県教育委員会あてに進達、同年4月11日付けで発掘調査を実施する旨の通知があり、同年4月18日付けで県振興局長あてに伝達を行った。

二串工区については、大部分が周知の埋蔵文化財包蔵地（山ノ神（二串）遺跡）に該当しており、平成24年度に県文化課が実施した農林業関係事業実施予定地の分布調査の結果、工区全体にわたり、君迫工区と同様に予備調査が必要と判断された。

予備調査は、平成26年2月17日～3月10日にかけて実施した。工事対象面積54,000㎡のうち、基本的に工事により掘削を受ける水田を対象に調査を行い、トレンチ36ヶ所（調査面積は約870㎡）のうち、遺物のみが出土したトレンチが10ヶ所、遺構のみ及び遺構・遺物が確認されたトレンチが12ヶ所あった。これらの遺構が検出された範囲は、いずれも工事によって掘削されることから協議の対象となった。協議の結果、工法変更が行われて、盛土保存される範囲が増加し、最終的に調査対象としたのは、約1,400㎡となった。

その後、平成26年6月10日付けで文化財保護法第94条の通知を大分県教育委員会あてに進達、同年6月12日付けで発掘調査を実施する旨の通知があり、同年6月17日付けで県振興局長あてに伝達を行った。

なお、両遺跡の契約期間等については、第1表を参照されたい。



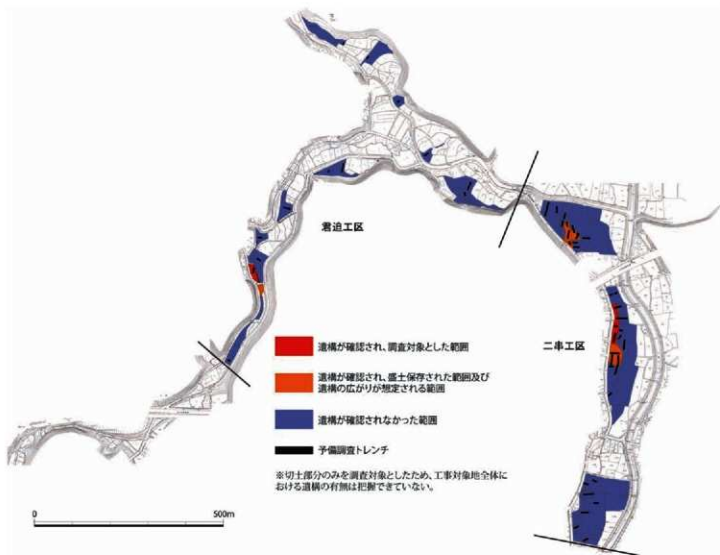
写真1 君迫遺跡作業風景



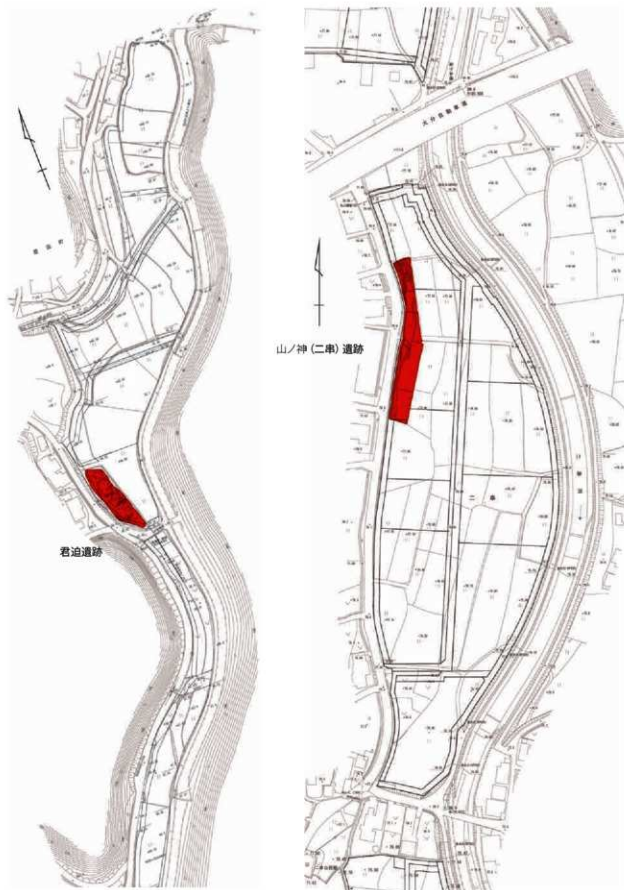
写真2 山ノ神（二串）遺跡作業風景

完了 始年 調査 年度	工区	開発面積 (㎡)	面 積 積 算 日 数	時代	地質	発掘調査等の委託契約				備考	
						遺跡名	業務内容	契約履行期間	発掘調査期間		調査面積 (㎡)
H22	朝日1・2工区	177,014	850	弥生 ~中世	一部 発掘調査	花ノ木	発掘	H23.6.15~H24.3.19	H23.7.4~12.5	10,723	
						平田	発掘整理	H23.6.15~H24.2.29	H23.10.3~12.24	2,749	
						尾部田	発掘整理	H23.6.15~H24.1.23	H23.10.19~11.16	1,655	
H23	小迫1・2工区	213,303	955	弥生 ~古代	一部 発掘調査	龍治屋廻り	発掘整理	H24.6.15~H25.1.15	H24.7.23 ~8.24	560	
						本村	発掘整理	H24.8.1~H25.2.28	H24.8.22 ~11.21	2,498	
						花ノ木	整理 報告書	-	-	-	朝日の遺跡I
						平田尾部田	整理 報告書	H24.6.15~H25.3.26	-	-	
H24	君迫工区	76,000	219	中世	一部 発掘調査	君迫	発掘整理	H25.7.1~H26.1.15	H25.8.19~11.12	580	
						花ノ木	整理 報告書	H25.6.1~H26.3.20	-	-	朝日の遺跡II
						龍治屋廻り本村	報告書	-	-	-	
H25	二串工区	54,000	870	弥生	一部 発掘調査	山ノ神(二串)	発掘	H26.7.15~H26.12.19	H26.8.20~H26.11.25	1,349	
						花ノ木	整理 報告書	H26.6.10~H27.3.31	-	-	朝日の遺跡III
						君迫	整理	-	-	-	
						山ノ神(二串)	整理	H27.5.11~H28.3.15	-	-	
						山ノ神 (二串) 君迫	報告書	H28.6.8~H29.3.15	-	-	本報告

第1表 県営経営体育成基盤整備事業朝日地区に伴う調査一覧



第1図 工実施区域と調査区位置図 (1/10,000)



第2図 君迫遺跡及び山ノ神(二串)遺跡周辺地形図(1/2,500)

また、発掘調査から報告書印刷までに至る関係者は、次のとおりである（職名・所属名は当時のまま）。

平成 25 年度（発掘調査【君迫遺跡】）

調査主体 日田市教育委員会

調査責任者 合原多賀雄（日田市教育委員会教育長）

調査統括 財津俊一（日田市教育庁文化財保護課長）

調査事務 園田恭一郎（同課埋蔵文化財係長）武内貴彦（同課専門員）華藤善昭（同課副主幹）

行時桂子 渡邊隆行（以上、同課主査）上原翔平（同課主任）

調査担当 若杉竜太（同課主査）

発掘作業員 赤尾ミチ子 秋吉新六 石井百合子 大関洋 蒲池妙子 小暮裕次 坂本由紀子 谷口なつ子
長谷部修一

整理作業員 伊藤一美 黒木千鶴子 高田美保 武石和美 安元百合

平成 26 年度（発掘調査【山ノ神（二串）遺跡】、整理等作業、報告書作成【君迫遺跡】）

調査主体 日田市教育委員会

調査責任者 合原多賀雄（日田市教育委員会教育長／～6月）三宮眞治郎（同教育長／7月～）

調査統括 財津俊一（日田市教育庁文化財保護課長）

調査事務 園田恭一郎（同課埋蔵文化財係長） 諫山温子（同課主事）

行時桂子 渡邊隆行（以上、同課主査）上原翔平（同課主任）

発掘調査及び整理担当 若杉竜太（同課主査）

発掘作業員 赤尾ミチ子 池永恵美子 石井百合子 井手基子 伊藤治美 大関洋 梶原スエ子 加藤祐一
蒲池妙子 合原建國美 小暮裕次 坂本由紀子 竹本和則 谷口なつ子 長谷部修一 深町正博
松下宣男 宮木博幸

整理作業員 伊藤一美 安元百合

平成 27 年度（整理等作業、報告書作成【山ノ神（二串）遺跡】）

調査主体 日田市教育委員会

調査責任者 三宮眞治郎（日田市教育委員会教育長）

調査統括 柴尾健二（日田市教育庁文化財保護課長）

調査事務 園田恭一郎（同課主幹（総括）／～平成 27 年 9 月）

古賀信一（同課主幹（総括）平成 27 年 10 月～）

諫山温子（同課主任） 行時桂子 渡邊隆行（以上、同課主査）上原翔平（同課主任）

整理担当 若杉竜太（同課主査）

整理作業員 伊藤一美 黒木千鶴子 武石和美 用松操 吉田里美 高瀬真奈美 田中美保

平成 28 年度（報告書作成・印刷【山ノ神（二串）遺跡・君迫遺跡】）

調査主体 日田市教育委員会

調査責任者 三宮眞治郎（日田市教育委員会教育長）

調査統括 池田寿生（日田市教育庁文化財保護課長）

調査事務 古賀信一（同課主幹（総括））長祐一郎（同課主査）

行時桂子 渡邊隆行（以上、同課主査）上原翔平（同課主任）

報告書担当 若杉竜太（同課主査）

整理作業員 伊藤一美 高瀬真奈美

（２）発掘作業の経過

君迫遺跡の発掘作業は平成25年8月19日、山ノ神(二串)遺跡の発掘作業は平成26年8月21日に着手した。それぞれの調査の主な経過は以下のとおりである。

なお、山ノ神(二串)遺跡の作業に際しては、遺構検出までを担当者が行い、遺構掘り下げ以降の作業は、発掘調査支援業務として発注し、調査を実施した。そのため、遺構検出終了から遺構掘り下げ開始まで約3週間、作業を中断している。

君迫遺跡

平成25年

- 8月19日 耕作土除去開始
- 9月5日 表土剥ぎ開始
- 9月9日 遺構検出、遺構掘り下げ開始
- 10月21日 遺構実測開始
- 10月28日 遺構掘り下げ終了
- 10月31日 空中写真撮影実施、遺構実測終了
器材の整理・撤収を行い、作業終了
- 11月11日 埋め戻し開始
- 11月12日 埋め戻し終了し、調査終了。

山ノ神(二串)遺跡

平成26年

- 8月21日 耕作土除去開始
- 8月28日 表土剥ぎ開始
- 9月9日 遺構検出開始
- 9月26日 遺構検出終了
作業中断し、支援業務発注
以下、支援業務による作業
- 10月15日 遺構掘り下げ開始
- 11月4日 遺構実測開始
- 11月11日 地元二串町及び朝日小学校児童を対象
に現地説明会実施。
二串町28名、朝日小学校132名（児童
124名・教員8名）参加
- 11月18日 空中写真撮影実施
- 11月20日 遺構掘り下げ、遺構実測終了
- 11月21日 器材整理・撤収を行い、調査終了。



写真3 山ノ神(二串)遺跡現地説明会風景

（３）整理等作業の経過

君迫遺跡の整理作業は、平成26年10月15日から10月31日の間、遺物の実測・製図等の委託業務を平成26年12月12日から平成27年1月31日の間、実施した。

山ノ神(二串)遺跡の整理作業は、平成27年6月1日から10月20日の間、遺物実測・製図等の委託業務を平成27年12月11日から平成28年2月26日の間、実施した。

出土遺物は水洗を行った後、摩耗や器面の剥落等で脆くなっているものについては、バインダー処理を実施した。注記・接合後は必要に応じて石膏による最低限の補強や復元を行っている。

第2章 遺跡の位置と環境

今回報告する君迫遺跡、山ノ神（二串）遺跡は、日田市大字二串に所在し、日田盆地の北部、君迫川・二串川により形成された沖積地に位置している。

遺跡の所在する大字二串は、日田市の町名区分上では朝日地区に含まれている。朝日地区は大字二串のほかには大字小迫、大字山田の3地域で構成されている⁹¹。

この朝日地区は、明治22年～昭和15年の日田郡の自治体区分である朝日村【日田盆地の北部、筑後川（三隈川）支流二串川の中・下流域に位置する】の範囲を踏襲したもので⁹²、朝日村は豊後国日田郡亘里郷内の村落として存在していた小迫・二串・山田村の3地域が明治22年に合併し、誕生している。

このように朝日地区の歴史を辿ると古くは豊後国日田郡亘里郷の一部に位置していたことが分かる。また、亘里郷という名前は古代日田五郷の一つとして『和名類聚抄』にも記されている⁹³。

以下、朝日地区に所在する主な遺跡について時代ごとに概観していく

旧石器・縄文時代の遺跡では、二串西原遺跡において、後期旧石器時代に属する石器（ナイフ形石器、台形様石器、細石刃など）が10数点確認されている⁹⁴。縄文時代の遺跡では、尾部田遺跡の調査で後期～晩期の集落が確認され、縄文時代の集落立地を考える上で貴重な例となった⁹⁵。

弥生時代の遺跡は、吹上原台地上に所在し、弥生時代を通じて拠点的な集落を営んだと考えられる吹上遺跡が挙げられる。6次調査では、銅剣や銅戈・貝輪など豪華な副葬品を有する喪棺墓で構成される特定集団墓が確認され、台地一帯が地域の中心的位置を占めていたと考えられる⁹⁶。また、本村遺跡の3次調査では、辻原台地と吹上台地の谷部に位置する沖積地上で弥生時代後期から終末期の集落⁹⁷、鍛冶屋廻り遺跡では、後期後半頃の土坑が多く検出されている⁹⁸。また、花ノ木遺跡では、後期の集落が確認されている⁹⁹。

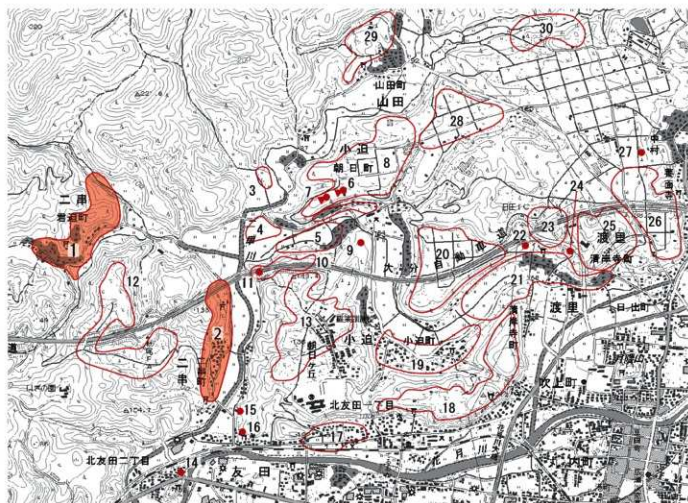
古墳時代に入ると、小迫辻原遺跡や朝日天神山古墳群といった日田市を代表する遺跡が登場する。吹上遺跡の所在する吹上原台地の北側、辻原台地上に所在する小迫辻原遺跡では、弥生時代末から古墳時代初頭にかけて営まれた三つの方形環濠建物、三つの環濠集落とこれらを区画するように掘り込まれた溝が2条確認されており、弥生時代末～古墳時代初頭の国家形成期の社会状況を解明する上で重要な集落が所在していたと考えられる¹⁰⁰。また、尾部田遺跡の調査では、小迫辻原遺跡と同時期の集落の存在が台地下の沖積地上でも確認され、小迫辻原遺跡と同時期の集落が展開する様相が明らかになった¹⁰¹。この他に、花ノ木遺跡では前期から中期の集落¹⁰²、平田遺跡では中期の集落¹⁰³、本村遺跡の5次調査では後期の集落や古代の水田用水路¹⁰⁴、などが確認されている。また6世紀中頃には、宮ノ原台地上にこの時期では県下最大級の朝日天神山2号墳が築かれ、その周溝からは埴輪の代わりと考えられる大型平底壺が出土している。その後の6世紀後半に1号墳が築かれ、大和政権とのつながりを考えることの出来る三輪玉が表採されている¹⁰⁵。

古代になると小迫辻原遺跡で、大型掘立柱建物や『大領』と書かれた土器が確認されており、この建物群の規則的な配置状況や規模から、郡司クラスの人物の居宅と想定されている。中世では建物群を堀や溝で囲んでいる屋敷跡が6ヶ所確認されるなど、古代から中世にかけても当時の社会生活を知る貴重な成果が挙げられている¹⁰⁶。また、花ノ木遺跡では数棟の古代の建物や溝¹⁰⁷、平田遺跡では規則的に配置された古代の建物群が確認されている¹⁰⁸。中世では朝日宮ノ原遺跡B地区では青磁や湖州鏡や合子などが一括で副葬された土坑墓が発見され¹⁰⁹、近世においては、鍛冶屋廻り遺跡で道路状遺構や水路などが発見されている¹¹⁰。

このように、朝日地区は数多くの遺跡が集中し、日田市の歴史を知る上で重要な地区であるといえる。

註

- (1) 日田市町名に関する告示 平成13年3月13日 告示第19号
- (2) 『角川日本地名大辞典』編纂委員会 『角川日本地名大辞典44大分県』角川書店 1980
- (3) 『日田市史』日田市 1990
- (4) 『九州横断自動車道路建設に伴う発掘調査概報』大分県教育委員会 1984
- (5) 行時志郎『尾部田遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書34集 日田市教育委員会 2001
- (6) 渡邊隆行『吹上IV-吹上遺跡6次調査の記録-』日田市埋蔵文化財調査報告書第70集(日田地区遺跡群発掘調査報告書8 日田市教育委員会 2006
- (7) 若杉竜太『本村遺跡3次』日田市埋蔵文化財調査報告書第51集 日田市教育委員会 2004
- (8) 上原翔平編『朝日の遺跡Ⅱ』日田市埋蔵文化財調査報告書第111集 日田市教育委員会 2014
- (9) 上原翔平編『朝日の遺跡Ⅲ』日田市埋蔵文化財調査報告書第116集 日田市教育委員会 2015
- (10) 田中裕介・土居和幸・清水宗昭『小迫辻原遺跡1』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書10 大分県教育委員会 1999(平成11年)
- (11) 若杉竜太『朝日の遺跡1』日田市埋蔵文化財調査報告書第108集 日田市教育委員会 2013
- (12) 若杉竜太編『朝日天神山古墳』日田市埋蔵文化財調査報告書第60集(日田地区遺跡群発掘調査報告7) 日田市教育委員会 2005
- (13) 行時志郎編『小迫辻原発掘調査概報』日田市教育委員会 1990
- (14) 土居和幸編『朝日宮ノ原遺跡・谷ノ久保遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第104集(市内遺跡発掘調査報告書10) 日田市教育委員会 2012
- (15) 若杉竜太『殿治屋廻り遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書 第92集 2010



- | | | | |
|-------------|-----------|------------|-----------|
| 1 君迫遺跡 | 8 朝日宮ノ原遺跡 | 16 片山石棺 | 24 草場古墳 |
| 2 山ノ神(二串)遺跡 | 9 城ノ越古墳 | 17 今泉遺跡 | 25 草場第1遺跡 |
| 3 平田遺跡 | 10 小迫横穴墓群 | 18 吹上遺跡 | 26 後迫遺跡 |
| 4 花ノ木遺跡 | 11 小迫古墳 | 19 殿治屋廻り遺跡 | 27 用松中村古墳 |
| 5 尾部田遺跡 | 12 二串西原遺跡 | 20 小迫辻原遺跡 | 28 山田原遺跡 |
| 6 朝日天神山1号墳 | 13 朝日ヶ丘遺跡 | 21 本村遺跡 | 29 山ノ口遺跡 |
| 7 朝日天神山2号墳 | 14 三郎丸古墳 | 22 草場原古墳 | 30 谷ノ久保遺跡 |
| | 15 鳥越古墳 | 23 草場第2遺跡 | |

第3図 周辺遺跡分布図(1/25,000)

第3章 君迫遺跡の調査

(1) 調査の概要

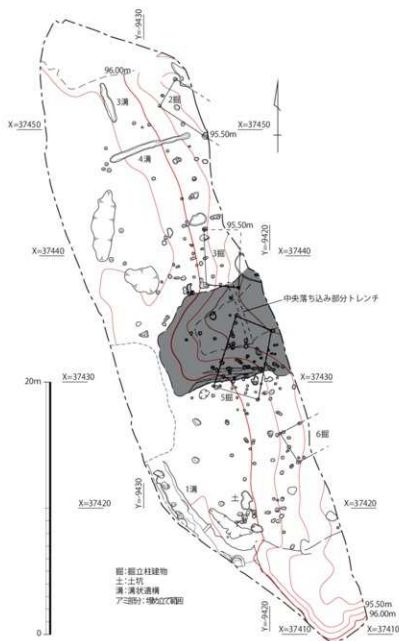
(第4図 写真図版1)

調査地は、君迫工区南西側の君迫川によって形成された谷部の左岸の段丘面の標高約95～96mの場所に位置する。

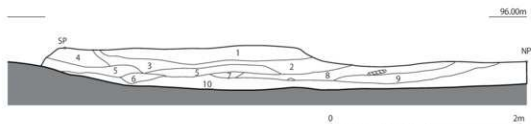
調査地周辺の地形は東西両方向から山の斜面が迫り、幅が約50mの狭い谷部になっている。

調査は、調査対象地の南側より表土剥ぎを開始した。遺構検出後は、やや粘性のある明茶褐色の砂礫層で、水田基盤土から20～40cm下で確認され、東側の君迫川に向かって緩やかに傾斜していた。

遺構は概ね調査区の東側から南側にかけて掘立柱建物4棟、土坑1基、溝状遺構3条、ピットが多数確認された。また、中央付近では、前述の明褐色の砂礫と異なる茶褐色の砂礫層に遺構が掘り込まれていた。そのため、トレンチを設定し、土層観察を行った結果、この部分は元来、調査区の西側にある谷から続く、緩やかに落ち込む谷状の地形を呈しており、この部分を埋め立てていたことを確認することができた。



第4図 遺構配置図 (1/300)



- | | |
|-----------------------------|-----------------------------|
| 1層 茶色砂礫層 (遺構検出面 2～3cmの礫混じり) | 6層 灰茶色粘質土 (やや砂っぽい、粗) |
| 2層 茶色粘質土 (緻密、粘り富有) | 7層 6層に同じ |
| 3層 暗茶色粘質土 (緻密、粘り気強い) | 8層 暗茶色粘質土 (礫含み、やや粗い) |
| 4層 灰茶色砂礫層 (5cm以上の礫混じり) | 9層 暗茶色粘質土 (2～3cmの礫含む、しまりなし) |
| 5層 暗茶色粘質土 (緻密、粘り気強い) | 10層 暗茶褐色粘質土 (礫含む 地山) |

第5図 中央落ち込み部分土層実測図 (1/40)

(2) 遺構と遺物

1. 掘立柱建物

調査区の東側において2・3・5・6号の4棟を確認したが、主軸方位はいずれも異なっている。最終的に1・4号については、建物として判断できなかったため欠番となっている。

2号掘立柱建物(第6図 写真図版2)

この建物は、調査区北東隅で検出されており、その東側は調査区外へと展開する。梁間1間×桁行2間以上の東西棟で、身舎面積は約11㎡以上である。主軸方向はN-56°-Wをとる。梁間の柱間寸法は西側より2.3m・2.1mで、桁行の柱間寸法は2.5mを測る。柱穴より遺物は出土していない。

3号掘立柱建物(第7図 写真図版2)

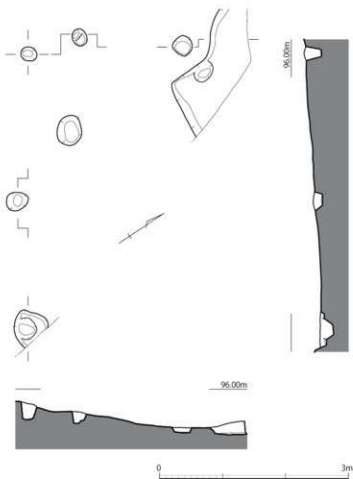
この建物は、調査区東側で検出されており、その北東隅は調査区外へと展開する。梁間2間×桁行2間以上の南北棟で、身舎面積は約12.4㎡以上である。主軸方向はN-3°-Wをとる。梁間の柱間寸法は南側より2.2m・2.3m、桁行の柱間寸法は東側より1.4m・1.2mを測る。柱穴より遺物は出土していない。

5号掘立柱建物(第8図 写真図版2)

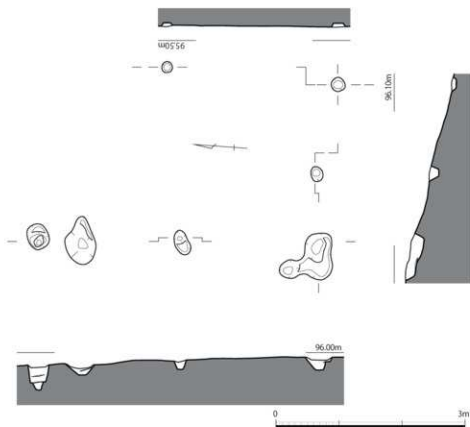
この建物は、調査区東側で検出された。梁間1間×桁行3間の南北棟で、身舎面積は約19.6㎡である。主軸方向はN-17°-Eをとる。梁間の柱間寸法は北辺で3.2m、南辺で3.9m、桁行の柱間寸法は西辺で2.0m・2.5m・1.4m、東辺で1.3m・1.5m・1.7m・1.2mを測る。この建物の南東隅の柱穴の床面と北東隅の柱穴の床面では、約50cmの高低差が認められる。柱穴より遺物は出土していない。

6号掘立柱建物(第9図 写真図版2)

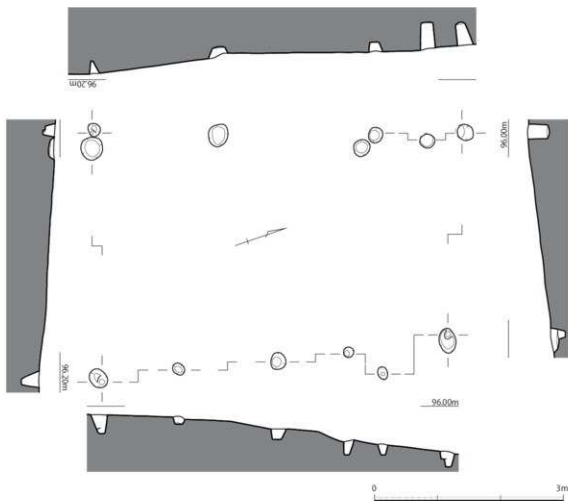
この建物は、調査区南東側で検出されており、その東側は調査区外へと展開する。梁間1間×桁行2間以上の東西棟で、身舎面積は約4.6㎡以上である。主軸方向はN-32°-Wをとる。梁間の柱間寸法は1.7m、桁行の柱間寸法は1.3m・1.4mを測る。柱穴より遺物は出土していない。



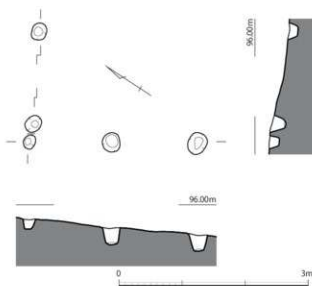
第6図 2号掘立柱建物実測図(1/60)



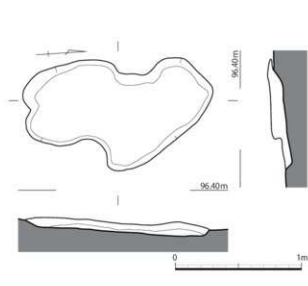
第7图 3号掘立柱建物实测图 (1/60)



第8图 5号掘立柱建物实测图 (1/60)



第9図 6号掘立柱建物実測図(1/60)



第10図 土坑実測図(1/30)

2. 土坑(第10図 写真図版2)

この土坑は、調査区の南側において1基のみ確認された。平面形態は不整形で、確認した規模は長軸約1.5m×短軸約0.9m、深さは検出面より約25cmを測る。床面は北側より南側へと緩やかに傾斜しており、壁面は緩やかに立ち上がる。遺物は出土していない。

3. 溝状遺構

今回の調査では3条を確認した。1号溝状遺構は、ほぼ南北に細長い調査区の南西側隅を調査区に沿うように延びる。3・4号溝状遺構は、調査区の北側に位置し、直線的に延びる。なお、2号は攪乱と判断したため欠番である。

1号溝状遺構(第11図 写真図版2)

この溝状遺構は、調査区の南東隅に位置しており、南北方向に直線的に延びる。確認した規模は長さ約10.5m、幅約1.3m、深さは検出面より約26cmを測る。断面は逆台形状を呈しており、床面は北側より南側へと傾斜している。遺物は土師質土器環・同安窯系青磁皿が出土している。

3号溝状遺構(第11図 写真図版3)

この溝状遺構は、調査区北側に位置しており、南北方向に直線的に延びる。確認した規模は長さ約3.2m、幅約0.7m、深さは検出面より約20cmを測る。断面は逆台形状を呈する。遺物は出土していない。

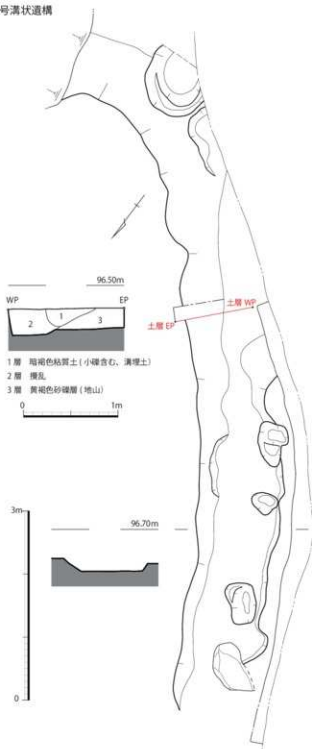
4号溝状遺構(第11図 写真図版3)

この溝状遺構は、3号溝状遺構の南1.5mに位置する。東西方向に直線的に延びており、確認した規模は長さ約6.6m、幅約0.6m、深さは検出面より約20cmを測る。断面は逆台形状を呈する。3号溝状遺構とは、その主軸をほぼ同一としており、有機的な繋がりも考えられる。遺物は出土していない。

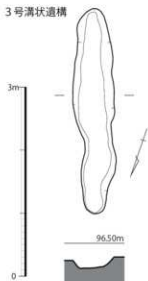
4. 出土遺物(第12図 写真図版3)

1～6・8は土師質土器で、1は1号溝状遺構、2・4・5は一括、3・6・8は中央落ち込みの出土である。1～5は坏で、1・2の底部には回転系切り離し痕が残る。6は碗の胴部片と考えられる。8は火鉢の脚部である。7は同安窯系青磁皿の口縁部片で、その内面に櫛描文が残る。9は西北九州産黒曜石の刮片である。

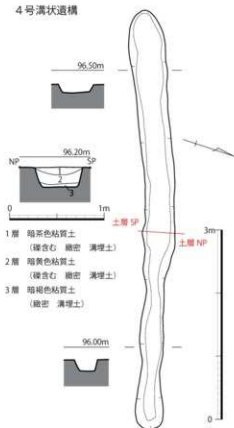
1号溝状遺構



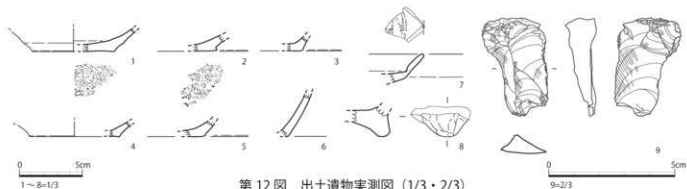
3号溝状遺構



4号溝状遺構



第11図 溝状遺構実測図 (1/60・土層 1/40)



第12図 出土遺物実測図 (1/3・2/3)

第4章 山ノ神（二串）遺跡の調査

（1）調査の概要（第13図 写真図版4）

調査地は、南北に広がる二串工区の中央よりやや北寄り、二串川右岸の沖積面の標高約77.0～77.5mの場所に位置する。

調査地周辺の地形は西側に台地、東側に二串川が流れ、幅約150～200mの沖積地が広がっている。

調査は、南北約100m、幅15～20mの調査対象地の北側より表土剥ぎを開始した。遺構検出面は、北側がやや礫混じり黄褐色粘質土で、水田基盤土から20～40cm下で確認された。

遺構は土坑2基、溝状遺構4条、ピットが数十個確認された。土坑は調査区中央付近と南側で1基ずつ検出、ピットは調査区北側の溝状遺構沿いにやや集中しているが、中央付近から南側は散在して確認された。

なお、調査区内を北から南にA・B・C・・・、西から東へ1・2・3とグリッドを設定し、遺構の位置確認や遺物の取り上げ、ピット番号を付けるのに利用している。

（2）遺構と遺物

1. 土坑

1・3・4号については、当初遺構として掘り下げを行っていたが、最終的に攪乱や自然の落ち込みと判断したため欠番となっている。

2号土坑（第14図 写真図版5）

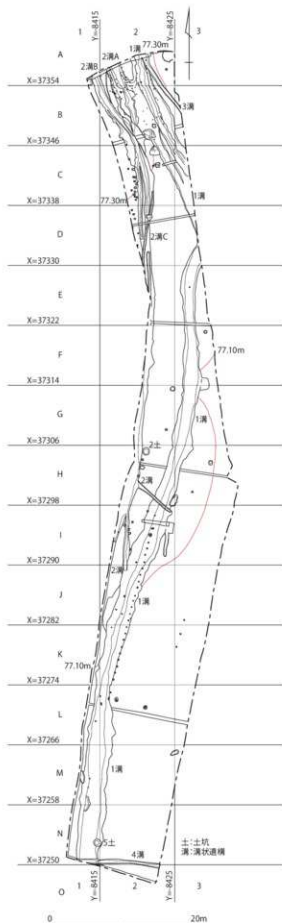
この土坑は、調査区中央部H2グリッドに位置する。平面形態は、やや不定形の円形である。確認した規模は長軸1.1m×短軸1.0m、深さは検出面より約30cmを測る。床面はわずかに舟底状を呈し、壁は緩やかに立ち上がる。土層観察から自然堆積と考えられる。遺物は出土していない。

5号土坑（第15図 写真図版5）

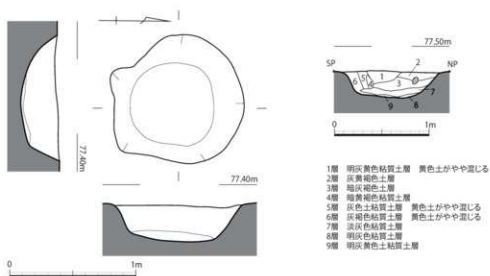
この土坑は、調査区南端のN1グリッドに位置する。平面形態は、円形状を呈する。確認した規模は長軸1.1m、短軸1.0m、深さは検出面より約1.45mを測る。床面は南側へと緩やかに傾斜し、壁面は急角度で立ち上がる。土坑中央の床面より約40cmにおいて、口縁部を下にした土師器甕が出土している。また、床面付近より用途不明木製品の小片が出土している。

出土遺物（第15図 写真図版9）

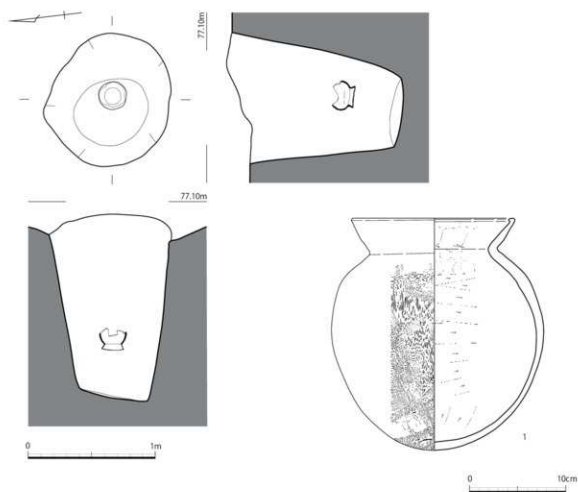
1は土師器甕である。口縁部端は内面に肥厚し、上面を平坦に仕



第13図 遺構配置図 (1/500)



第14図 2号土坑実測図 (1/30・土層 1/40)



第15図 5号土坑及び出土遺物実測図 (1/30・1/4)

上げる。肩部がやや厚く、底部は丸底となる。調整は、外面にハケメ、内面にケズリが残る。口縁部及び胴部に黒斑が残る。また、胴部には焼成時のものと考えられる多数の円形状の剥離痕が残る。

2. 溝状遺構

今回確認された溝状遺構は4条である。1号溝状遺構は、南北方向に細長い調査区の中央をほぼ縦断している。2号溝状遺構は、調査区北側で1号溝状遺構と複雑に切り合いながら調査区西側の中央付近まで延びている。この1・2号溝状遺構の土層実測図に関しては、双方の切り合い関係を分かりやすくするため、便宜上同一のページに掲載している(第17図)。3号溝状遺構は、調査区北東隅を南北に直線的に延びており、1号溝状遺構を切る。4号溝状遺構は、調査区南端を東西方向に直線的に横断しており、1号溝状遺構を切る。その主軸方向は、1～3号溝状遺構と異とする。

1号溝状遺構(第16・17図 写真図版5～7)

この溝状遺構は、調査区の中央を北端部から南端部へと延びるが、調査区北端より約16mで一度調査区外となる。5号土坑、3・4号溝状遺構によって切られる。また、12・J2グリッドにて確認された1号溝状遺構を切るビット列は、その埋土から近現代の遺構と考えられる。

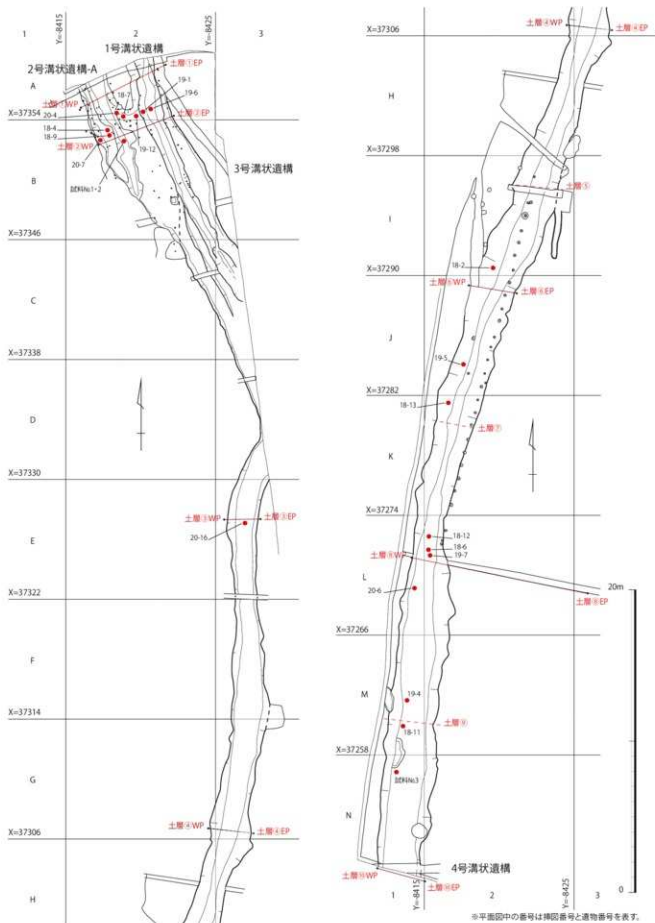
確認した規模は、長さ約99m、幅約2～3m、深さは検出面より約20～45cmを測る。北端では、径約10cmの小ビットが多数確認されており杭痕と考えられる。杭痕に規則性は確認できなかったが、塚の可能性がある。溝状遺構の断面は緩やかな三角形状であるが、南側では逆台形状を呈している。その床面の標高は、北端で76.920m、南端で76.600mを測っており、下流となる南側へと緩やかに傾斜している。土層観察による埋土の状況は、掘り直しはなく、自然堆積である。北端部の土層①・②(第17図)では、固くしまった鉄分やマンガンの沈着層が確認された。また、全体的に粘質層が堆積しており、水路としての機能が想定されよう。遺物は、各グリッドより弥生土器・土師器・須恵器類などが出土している。取り上げの層位について土層①・②(A・Bグリッド)では、鉄分・マンガンの沈着層を中層として、その上下層の3層に分けている。土層③・④(E～Gグリッド付近)では、明確に判断ができなかったため検出面より深さ約15cmまでを上層として下層の2層に分けている。土層⑥・⑧・⑩(J・L・Nグリッド)では、床面上の粘質灰色土を下層とし、上層の2層に分けている(第17図)。

出土遺物(第18図～第23図 写真図版9～11・13～14)

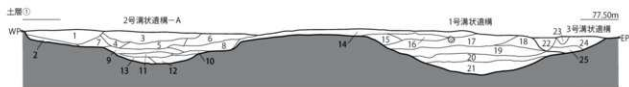
1号溝状遺構出土として図示した遺物の出土位置・層位については観察表の出土遺構の項目に記述している。また、項目中のA2等についてはグリッドを表している。なお、一部の遺物については、詳細な出土位置の記録を失念し取上げを行っているため、グリッド等の出土位置を表記していないものもあることを記しておく。

第18図の1～16は弥生土器である。1は椀で、緩やかに内彎しながら口縁部へと立ち上がる。内外面ともに指オサエが顕著である。2は脚付甕で、口縁部は緩やかに外反しながら短く立ち上がる。胴部の中程に最大径をもつ。脚部は高く、八字状に大きく開く。3～14は甕である。口縁部の形態は、3・6・7は緩やかに外反し、5・8・9は直線的に、4は短く直立する。5・7・8の頸部は強く屈曲するが、6・7は緩やかである。また、6～9には、断面三角形の突帯が1条貼り付けられる。10は胴部片で、断面三角形の突帯が1条貼り付けられる。11～14は底部で、11がやや凸レンズ状を呈し、12～14は平底である。15・16は脚付甕の脚部と考えられる。ともに器高が高く、16は中程で強く屈曲し八字状に大きく開く。

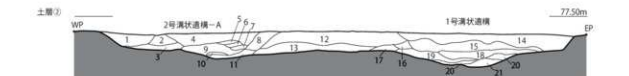
第19図の1～12は弥生土器の壺である。1は小型で、口縁部は短く外反し、端部は尖り気味となる。2の口縁部は短く直線的に開く。胴部は球形状となる。3～5は複合口縁で、3の複合部は袋状を呈し、4・5はや



第16図 1号溝状遺構実測図 (1/250)



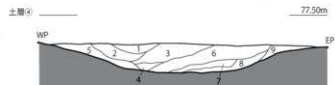
- | | | |
|---|--|--|
| <p>2号溝状遺構-A</p> <ul style="list-style-type: none"> 1層 暗茶褐色砂質土(固くまる) 2層 地山(崩れずき) 3層 やや細かい灰土 4層 灰土 5層 灰土(砂質) 6層 暗灰茶褐色砂質土 7層 灰土(砂分を含む) 8層 暗灰茶褐色土 9層 暗灰茶褐色土(鉄分、マンガンの沈着層、固くまる) 10層 暗灰茶褐色土(鉄分を含む) 11層 暗灰茶褐色土(灰白色土を含む) 12層 暗灰褐色粘質土 13層 灰白色粘質土 | <p>1号溝状遺構</p> <ul style="list-style-type: none"> 14層 暗黄褐色土 15層 灰黄褐色土 16層 暗灰黄褐色土 17層 灰土 18層 やや細かい灰土(砂分を含む) 19層 暗灰黄褐色土(鉄分、マンガンの沈着層、固くまる) 20層 暗灰土(砂質、鉄分を含む) 21層 暗灰褐色粘質土 | <p>3号溝状遺構</p> <ul style="list-style-type: none"> 22層 灰土(砂分を含む) 23層 暗灰褐色粘質土 24層 やや細かい灰褐色土(マンガンをやや含む) 25層 灰褐色土 |
|---|--|--|



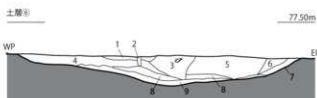
- | | |
|--|--|
| <p>2号溝状遺構-A</p> <ul style="list-style-type: none"> 1層 暗灰茶褐色土(鉄分、マンガンの沈着層、硬くまる) 2層 暗灰黄褐色土 3層 暗灰褐色土(硬くまる) 4層 やや細かい灰土 5層 灰土(砂質) 6層 灰土(粘質) 7層 暗茶褐色土(硬くまる、砂質) 8層 暗灰褐色土 9層 暗灰褐色土(砂質、硬くまる) 10層 暗灰黄褐色土(粘質) 11層 暗灰黄褐色土 | <p>1号溝状遺構</p> <ul style="list-style-type: none"> 12層 暗灰褐色土(鉄分を含む) 13層 暗灰褐色土 14層 暗灰黄褐色土(鉄分をやや含む) 15層 灰黄土(砂質) 16層 灰褐色土(砂質) 17層 灰土(硬くまる) 18層 暗灰褐色土(鉄分、マンガンの沈着層、硬くまる) 19層 灰土(砂質、鉄分を中や含む) 20層 暗灰褐色粘質土 21層 暗灰褐色土(砂質、黄土を含む) |
|--|--|



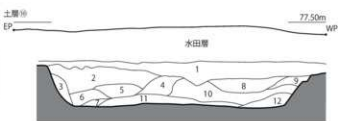
- 1層 暗灰褐色土(砂質、粘り強い)
- 2層 暗灰褐色土(粘質、マンガンを多く含む)
- 3層 灰土
- 4層 灰褐色土(砂分多し)
- 5層 暗灰褐色土
- 6層 やや細かい灰黄褐色土(黄土を含む)
- 7層 灰土(鉄分を多く含む)



- 1層 暗灰褐色土(砂質、粘りが強い)
- 2層 暗灰褐色土(粘り強い、砂分多し)
- 3層 暗灰褐色土(粘質)
- 4層 暗灰褐色土(黄土がまじる粘質)
- 5層 暗灰褐色土(砂質)
- 6層 灰褐色土(黄土を含む)
- 7層 灰褐色土
- 8層 暗灰褐色土(粘質、マンガンをやや含む)
- 9層 やや細かい灰黄褐色土(黄土を含む)



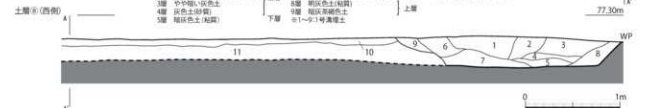
- 1層 暗灰褐色土(砂質、粘りが強い)
- 2層 暗灰黄褐色土(粘質)
- 3層 暗灰褐色土(粘質)
- 4層 暗灰褐色土(黄褐色土、砂分を含む)
- 5層 灰褐色土(粘質、黄土を含む)
- 6層 暗灰黄褐色土(鉄分、マンガンを含む)
- 7層 暗灰褐色土
- 8層 灰土(粘質)
- 9層 暗灰褐色土(粘質)



- 1層 暗灰褐色土
- 2層 暗灰黄褐色土(鉄分を多く含む)
- 3層 暗灰土(粘質)
- 4層 暗灰褐色土(粘質)
- 5層 灰土(粘質)
- 6層 灰褐色土(粘質、鉄分をやや含む)
- 7層 暗灰黄褐色土(粘質)
- 8層 やや細かい灰土(粘質)
- 9層 灰白色土(粘質)
- 10層 灰褐色土(粘質)
- 11層 暗灰褐色土(粘質)
- 12層 灰褐色土(粘質)



- 1層 灰褐色土(黄褐色土をやや含む)
- 2層 暗灰黄褐色土(鉄分を多く含む)
- 3層 やや細かい灰土
- 4層 灰土(砂質)
- 5層 暗灰褐色土(粘質)
- 6層 暗灰黄褐色土(鉄分を多く含む)
- 7層 暗灰黄褐色土(鉄分をやや含む)
- 8層 暗灰土(粘質)
- 9層 暗灰黄褐色土
- 10層 暗黄褐色土(水田基礎土)
- 11層 暗灰褐色粘質土(地山)



第 17 図 1号溝状遺構土層実測図 (1/40)

や内彎気味となる。6～8は胴部片で、6・7には断面三角形の突帯が、8はM字状の多条突帯が貼付けられる。9は肩部片で、櫛目が残る。10・11は底部で、10はやや丸みをおびており、11は平底である。11の底面には、焼成前穿孔が1ヶ所残る。12は胴部で、最大径に断面三角形の突帯が1条貼付けられる。

第20図の1～11は弥生土器である。1～5は高環で、1・2は口縁端部を欠く。3は坏部で、体部に明瞭な段を有する。口縁部は直線的に立ち上がり、端部はやや外反する。4・5は脚部で、5には穿孔が1ヶ所残る。6～8は器台である。6はくびれ部を器高の中段に有し、7は口縁直下にて強く屈曲する。9・10は支脚である。9は上面の径が底面より小さくなる。10の上面・底面の径は、ほぼ同一で、くびれを器高の中段に有する。11はミニチュア土器の鉢で、内外面に指頭痕が残る。

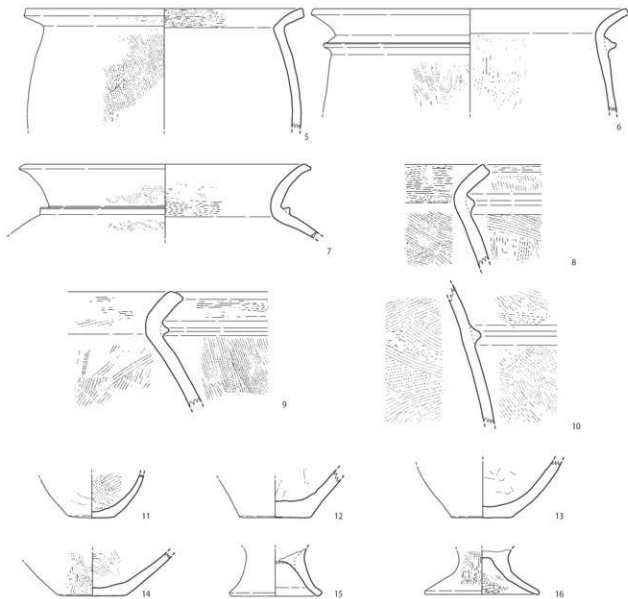
12～15は須恵器である。12は坏蓋で、口縁端部を欠損する。天井部と口縁部の境に段を有する。13は坏身である。口縁部の立ち上がりは高くやや内傾し、端部内面に段がみられる。14は高台付坏で、断面方形の高台が貼付けられる。15は甕の頸部である。櫛描列点文及び穿孔が1ヶ所残る。

16～24は土師器である。16は鉢で、器高は低く、口縁端部へと緩やかに内彎する。17・18は壺で、17の口縁部は短く直線的に立ち上がる。18は口縁部を欠くが、胴部の外面にススが付着する。19・20は甕で、19の口縁部は緩やかに外反する。20の口縁部は直線的で、頸部は強く屈曲する。外面にタタキが施される。21・22は小型丸底甕である。23は高環の脚部で、端部で強く屈曲して大きく開く。24は支脚である。その上面は平坦で、中央に穿孔を有する。底面へと八字状に緩やかに開く。25は同安窯系青磁の底部で、内面に櫛描文が残る。

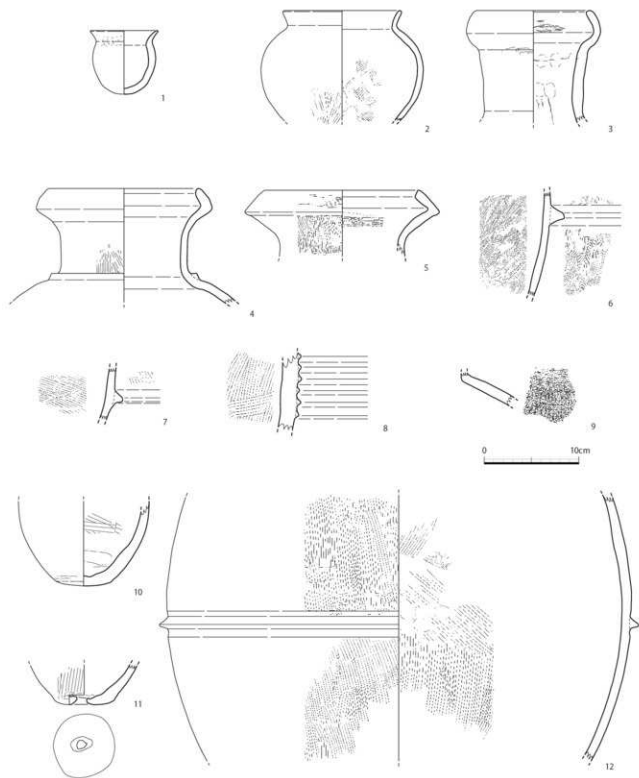
第21図の1・3は、西北九州産と判断できる黒曜石製の縦長剥片である。1・3は、両側縁（刃部）に微細な剥離がみられる。1は点状打面（大剥離面）の右側に自然面が残っており、3は小さく平坦な剥離打面である。2は姫島産黒曜石製の縦長剥片で末端に自然面が見られ、打面は小さな剥離打面である。

4～7は打製石鏃で、4・5・7はサヌカイト製、6のみ姫島産黒曜石製である。4・5は平基無茎石鏃、6・7は凹基無茎石鏃であり、7に比べ6は挟りが浅い。4・6・7は表裏ともに全体的に細かな調整が施されているが、5の背面にはやや大きめの剥離面が確認できる。8・9は石匙で、8は安山岩製の横形石匙で両面に調整が行われ、幅の広い大きなつまみが作られる。9はサヌカイト質安山岩製の縦形石匙で、薄手の不定形な横長剥片を素材に用いている。基部の両側面に表裏から小さなつまみ部を形成し、一方の側面に刃部の加工が施される。それ以外は素材剥片の剥離面が大きく残されている。先端部よりを半分近く欠損している。10・11は片岩製の打製石斧で、両者とも周辺部に集中的な加工が施されて全体形が整えられているが、10の基端および基部は節理面を利用している。10・11の断面の厚さや重量の差は、用途の違いを想定させる。

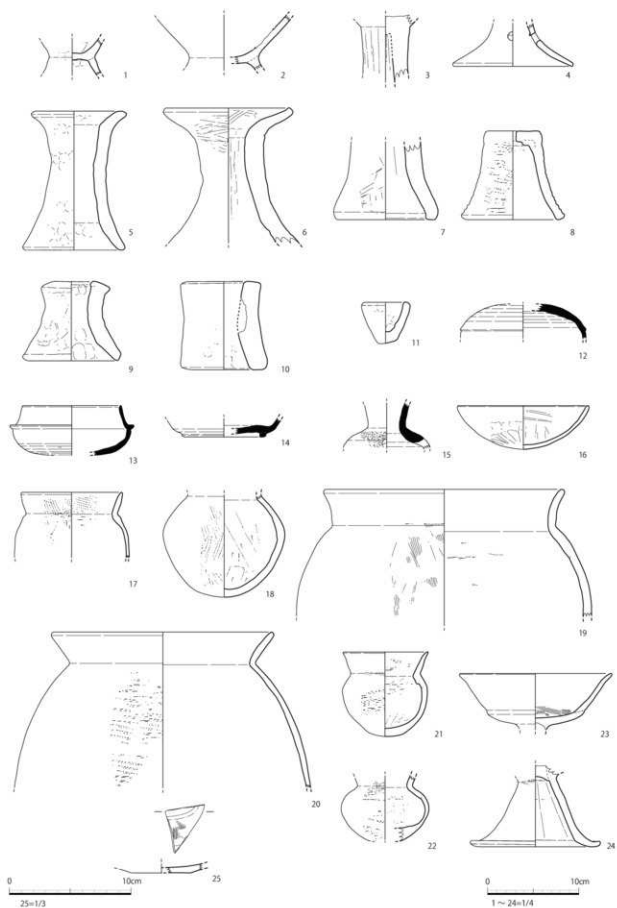
第22図の1～6は打製石斧で、1・7・8は片岩製、2は緑泥片岩製、3～5は安山岩製でありすべて欠損品である。調整加工の打ち欠きは周辺部に集中する傾向が見られるが、全体的に風化が進んでいる。また、1・2・4・5・6の刃部付近には、磨痕が観察される。この磨痕が製作時の仕上げの研磨によるものか、使用による磨耗か、1号溝状遺構の機能を水路と想定した際の水磨による風化なのかは明確な判断が下せない。7は片岩製の扁平打製石斧の未成品と考えられるが、わずかに縁が反ることから石鏃としての機能も想定しておきたい。8は安山岩製の石包丁形石器と考えられる。上辺の背面には磨痕が残るが、それが人為的なものなのか自然のものか定かでない。また、下辺の調整加工は刃部形成の可能性がある。第23図の1～4は石包丁で、1・3は黒色片岩、2・4は粘板岩を石材としている。5は堆積岩製の砥石で、ほぼ完形である。6は凝灰岩製の砥石で、端部・側面部に打痕が残る。また、表面の一部に磨痕が残る。7は安山岩製の磨石であるが、大半を欠損している。表裏・側面に磨痕が残る。8は用途不明の環状鉄製品である。



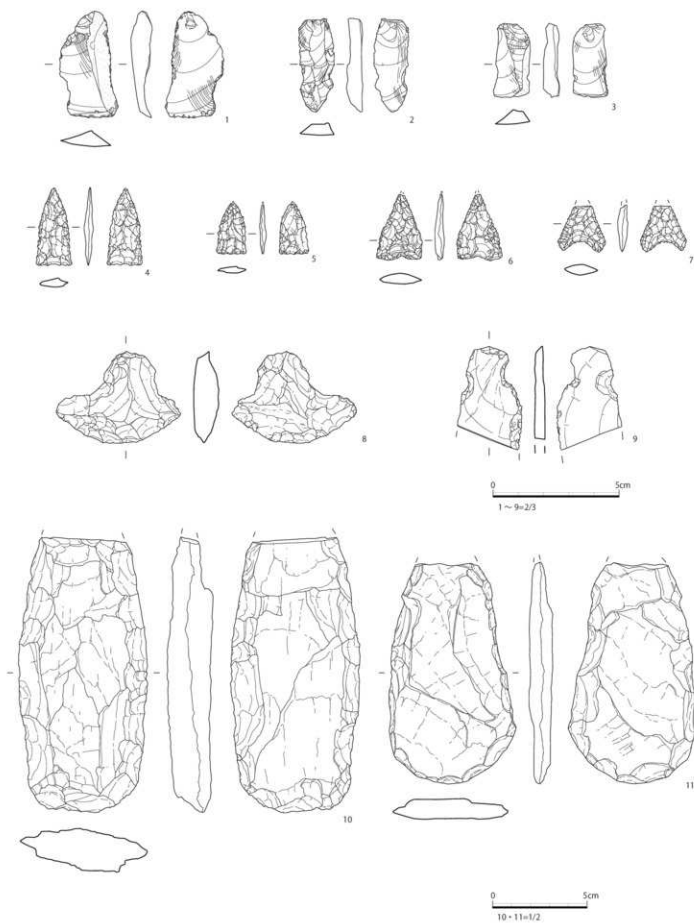
第18图 1号溝状遺構出土遺物実測図(1)(1/4)



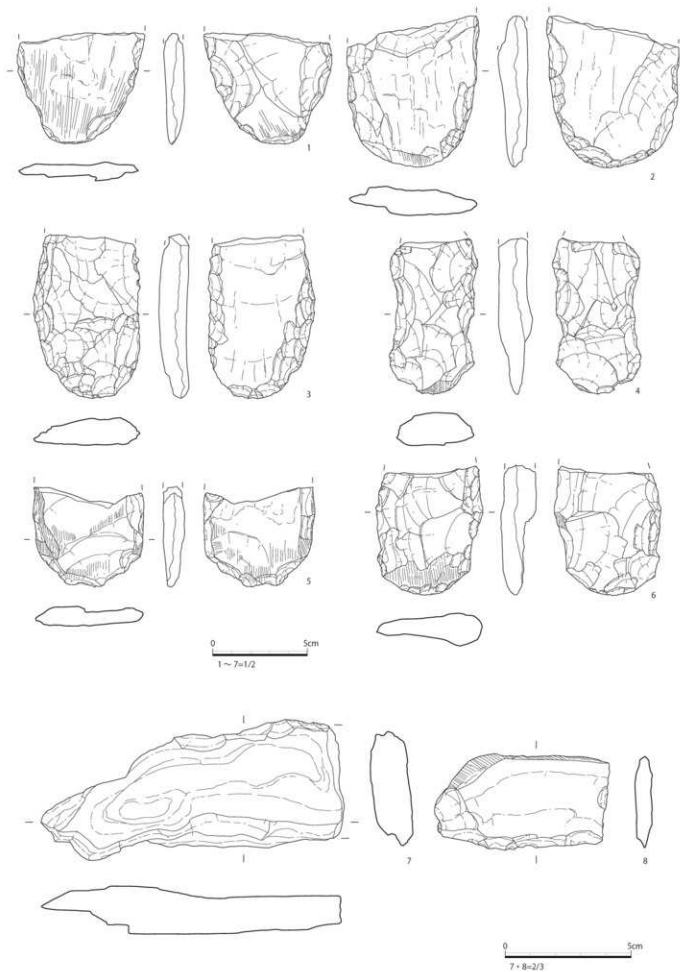
第19图 1号沟状遺構出土遺物実測図(2)(1/4)



第 20 图 1号沟状遺構出土遺物実測図(3) (1/3・1/4)



第 21 图 1 号溝状遺構出土遺物実測図 (4) (2/3・1/2)



第 22 图 1 号满状遗构出土遗物实测图 (5) (2/3 · 1/2)



第23图 1号沟状遺構出土遺物実測図(6)(1/2)

2号溝状遺構（第24図 写真図版7～8）

この溝状遺構は、調査区北端部から中央へと延びる溝で、A・B・C・D・Eの5条が確認された。A・B・Cの3条は調査区北側において重複しており、その切り合いはA→B→Cとなる。

2号溝状遺構-Aは、調査区北端より南北方向に緩やかにカーブしており1号溝状遺構を切る。北端では、径約10cmの小ピットが多数確認されており1号溝状遺構と同様に杭痕と考えられる。確認した規模は、長さ約24m、幅は北側で1.9m、南側で約0.8m、深さは検出面より約10～30cmを測る。断面は逆台形状で、床面はやや凸レンズ状となる。床面の標高は、北側で77.050m、南側で77.090mを測るが、そのレベル差は4cmと起伏の範疇であり、1号溝状遺構と同様に下流となる南側へと流れたと考えられる。土層観察による埋土の状況は、掘り直しではなく、自然堆積である。また、鉄分やマンガンの沈着層・粘質層を確認しており水路としての機能が想定できる。遺物の取り上げは、鉄分・マンガンの沈着層を中層として、その上下層の3層に分けている（土層①・②、A・Bグリッド）。

2号溝状遺構-Bは、調査区北端より南北方向にS字状に延びており2号溝状遺構-Aを切る。確認した規模は、長さ約77m、幅約1.2～2m、深さは検出面より約25cmを測る。断面は逆台形状を呈しており、床面の標高は北側で77.080m、南側で77.040mを測っており南流していたものと想定される。遺物の取り上げは、土層で明確に判断できなかったため検出面より深さ約20cmまでを上層として下層の2層に分けている（土層④・⑤、C・Dグリッド）。

2号溝状遺構-Cは、南北方向に直線的に延びており2号溝状遺構-A・Bを切る。確認した規模は長さ約15m、幅約0.3m、深さは検出面より約10cmを測る。その断面は逆台形状を呈する。

2号溝状遺構-Dは、調査区中央付近において2号溝状遺構-Bより派生しており1号溝状遺構を切る。確認した規模は長さ約6m、幅約0.2m、深さは検出面より約10cmを測る。その断面は逆台形状を呈する。

2号溝状遺構-Eは、調査区中央付近において2号溝状遺構-Bを切る。確認した規模は長さ約7.5m、幅約0.3m、深さは検出面より約15cmを測る。その断面は逆台形状を呈する。

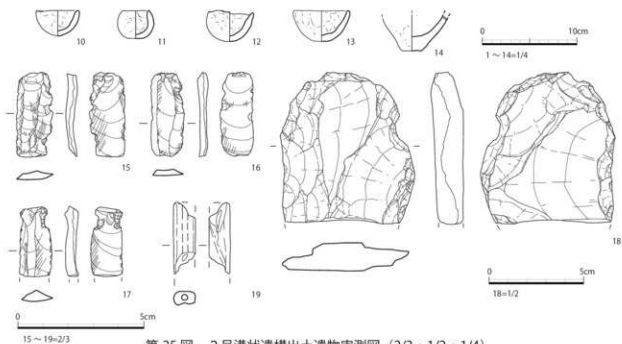
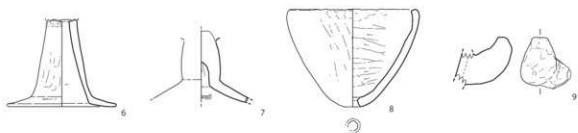
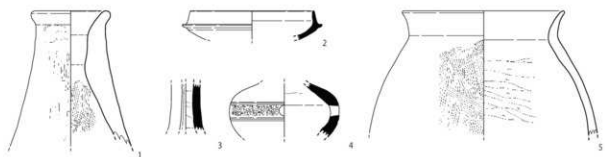
出土遺物（第25図 写真図版11・12・14）

2号溝状遺構出土として図示した遺物の出土位置・層位については観察表の出土遺物の項目に記述している。また、項目中のA2等についてはグリッドを表している。なお、一部の遺物については、詳細な出土位置の記録を失念し取上げを行っているため、グリッド等の出土位置を表記していないものもあることを記しておく。

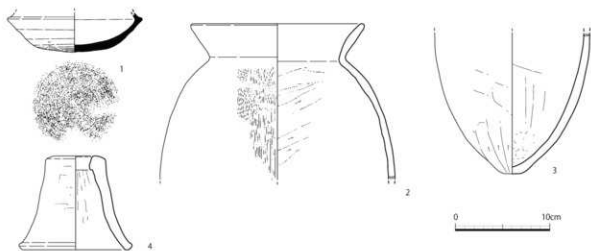
1は弥生土器の器台である。2～4は須恵器で、2の坏身は受け部より口縁部へとほぼ垂直に立ち上がる。3は高坏の脚部で、長方形の透かしが残る。4は連の胴部で、2本の沈線間に波状文及び穿孔が1ヶ所残る。

5～14は土師器である。5は裏で、口縁部は短くやや外反し、その端部は尖りぎみである。6・7は高坏の脚部である。6は脚上部に残る被熱痕から彌羽口への転用である。8は鉢形の甗で、口縁端部はやや内彎し、底部に穿孔が1ヶ所残る。9は甗の把手である。10～13はミニチュア土器で、10～13は鉢、14は裏である。

15・16は西北九州産黒曜石製の縦長剥片である。両側辺と大剥離面の稜線がほぼ並行となることから小石刃といえよう。幅が1.30・1.45cmを測る事から細石刃とは弁別される。15は自然面の平坦打面でも頭部調整が見られ、両側縁・末端に使用によると推測される微細剥離が観察される。16は打面端部の一部を欠損している。大剥離面の稜線に磨耗が見られ、さらに一側縁に微細剥離が認められるが、共に二次的なアクセシントの可能性が高い。17は西北九州産黒曜石製の縦型石匙で、自然面の平坦打面直下の両側縁につまみ部の抉入の加工が施されている。また、両側縁に使用による可能性が考えられる微細剥離が認められる。18は安山岩製の扁平打製石斧である。一端に使用によると考えられる磨耗痕がみられるので、刃部側の可能性があるが定かでない。19は硬玉製の管玉である。



第25图 2号沟状遺構出土遺物実測図 (2/3・1/2・1/4)



第26图 1・2号沟状遺構出土遺物実測図 (1/4)

1・2号溝状遺構出土遺物 (第26図 写真図版12)

ここでは、1号溝状遺構と2号溝状遺構出土遺物で、接合した遺物について記述する。

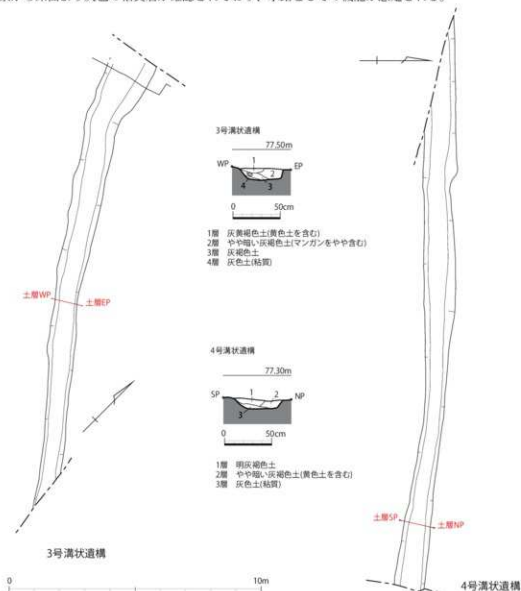
1は須恵器の坏身で、口縁端部を欠損している。底部外面に直線1本によるヘラ記号が残る。2・3は土師器の甕である。2の口縁部は中程で肥厚する。外面に縦方向の刷毛目、内面はケズリを施す。3は底部でやや尖りぎみとなる。内外面に工具ナデを施す。4は支脚である。上部平坦面の中央に穿孔が残る。

3号溝状遺構 (第27図 写真図版8)

3号溝状遺構は、調査区の北東端部に位置しており、1号溝状遺構を切る。南北方向に直線的に伸びており、確認した規模は長さ約9m、幅約0.4m、深さは検出面より約14cmを測る。断面は逆台形状で、床面は平坦である。土層観察から床面より灰色の粘質層が確認されており、水路としての機能が想定される。

4号溝状遺構 (第27図 写真図版8)

4号溝状遺構は、調査区の南端に位置しており、1号溝状遺構を切る。東西方向に直線的に伸びており、確認した規模は長さ約11m、幅約0.6m、深さは検出面より約10cmを測る。断面は逆台形状を呈し、床面は平坦である。土層観察から床面より灰色の粘質層が確認されており、水路としての機能が想定される。

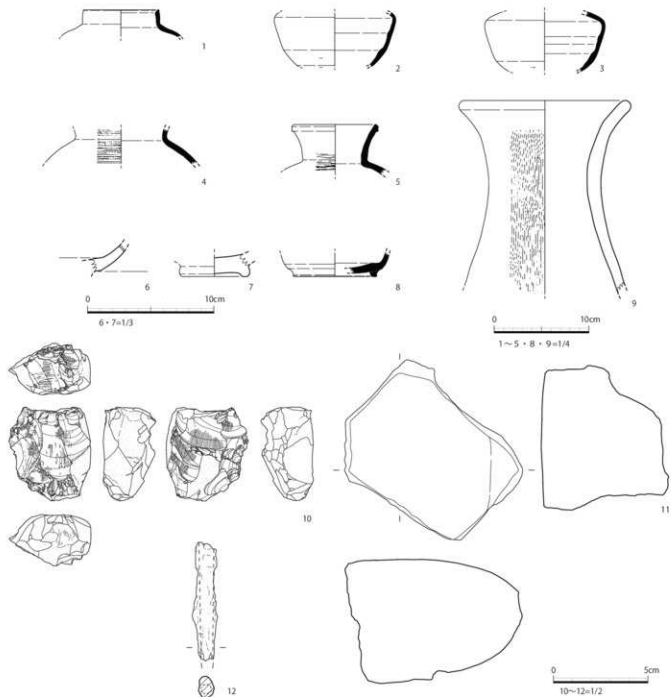


第27図 3・4号溝状遺構実測図 (1/150・土層 1/40)

その他の出土遺物（第 28 図 写真図版 12・14）

1～5・8は須恵器である。1は短頸壺で、口縁部は短く直立する。2～5は壺で、2・3は肩部、4は頸部、5は口縁部である。5の口縁部は緩やかに外反しながら立ち上がり、端部は肥厚する。8は高台付杯の底部で、断面方形の高台が貼付けられる。6・7は龍泉窯系青磁碗の底部である。9は弥生土器の器台である。

10は縦長剥片石核で、単剥離打面から正面で縦長剥片を2枚剥離している。背面でも同打面から縦長剥片を剥離しているが剥離は途中で止まっている。一側面は表裏からの側面調整が施されているが、もう一方の側面と背面中央部に自然面が残っている。腰岳産の可能性のある漆黒色で光沢の強い垂角礫が利用されている。11は石皿で安山岩製である。12は鉄鏝の茎部と考えられる。



第 28 図 その他の出土遺物実測図 (1/2・1/3・1/4)

第5章 自然科学分析

(1) 樹種同定

株式会社パレオ・ラボ

1. はじめに

日田市に所在する山ノ神(二串)遺跡は、日田盆地西部、二串川右岸の沖積地に広がる、弥生時代後期～古墳時代初期の遺跡である。ここから出土した木材3点について樹種同定を行った。なお、同一試料を用いて放射性炭素年代測定も行われている(放射性炭素年代測定の報告参照)。

2. 試料と方法

試料は、1号溝北端から出土した木材が2点(No.1,2)と、1号溝南側の上層一括から出土した木材が1点(No.3)である。調査所見から、遺構の時期は弥生時代後期～古墳時代初期と推測されている。放射性炭素年代測定の結果によれば、1号溝南側のNo.1は弥生時代中期初期～中期前半、No.2は弥生時代中期初期および中期後半、1号溝南側の上層一括のNo.3は江戸時代中期か江戸時代後期～大正時代に相当する暦年代を示した(放射性炭素年代測定の報告参照)。

これらの試料から、剃刀を用いて3断面(横断面・接線断面・放射断面)の切片を採取し、ガムクロラールで封入してプレパラートを作製した。これを光学顕微鏡で観察および同定、写真撮影を行った。残りの試料は日田市教育委員会に保管されている。

3. 結果

樹種同定の結果、広葉樹のムクノキと、ツバキ属、ネムノキの3分類群が確認された。

以下に、同定根拠となった木材組織の特徴を記載し、光学顕微鏡写真を図版に示す。

第2表 樹種同定結果

No.	遺構	器種	樹種	木取り・形状
1	1号溝北端	不明	ムクノキ	不明
2	1号溝北端	加工木?	ツバキ属	割材?
3	1号溝南側上層一括	不明	ネムノキ	不明

(1) ムクノキ *Aphananthe aspera* (Thunb.) Planch. ニレ科 写真4 1a-1c (No.1)

径が中型で厚壁の道管が、単独ないし2～3個複合して均等に分布する散孔材である。軸方向柔組織は周囲状～5列幅程度の帯状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は1～6列幅で、方形細胞もしくは直立細胞が上下端に2細胞程度連なる異性である。

ムクノキは関東以西の暖帯から亜熱帯に生育する落葉高木である。材は堅く、密で強靱である。

(2) ツバキ属 *Camellia* ツバキ科 写真4 2a-2c (No.2)

小径の道管がほぼ単独で密に分布する散孔材で、晩材に向けてやや径を減じる。道管の穿孔は10段程度の横棒からなる階段状である。放射組織は方形もしくは直立細胞が上下に2～4細胞連なる異性で、1～3列幅程度、多列部が単列部と同じ大きさである。円形に著しくふくれた大型の結晶が単列部に認められる。

ツバキ属は温帯から暖帯に生育する常緑高木もしくは低木である。ヤブツバキやサザンカ、チャノキなどがある。材は重硬および緻密で、切削加工および割裂は困難であるが、強靱で耐朽性は大きい。

(3) ネムノキ *Albizia julibrissin* Durazz. マメ科 写真4 3a-3c (No.3)

大型で丸い道管が年輪のはじめに数列並び、晩材に移行するに従って徐々に径を減ずる半環孔材である。軸方向柔組織は周囲状、晩材では翼状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は1～3列幅で、すべて平伏細胞からなる同性である。

ネムノキは暖帯から熱帯に分布する落葉高木である。材はやや軽軟で割裂性は大きく、切削加工は容易であるが、耐朽性および保存性は低い。

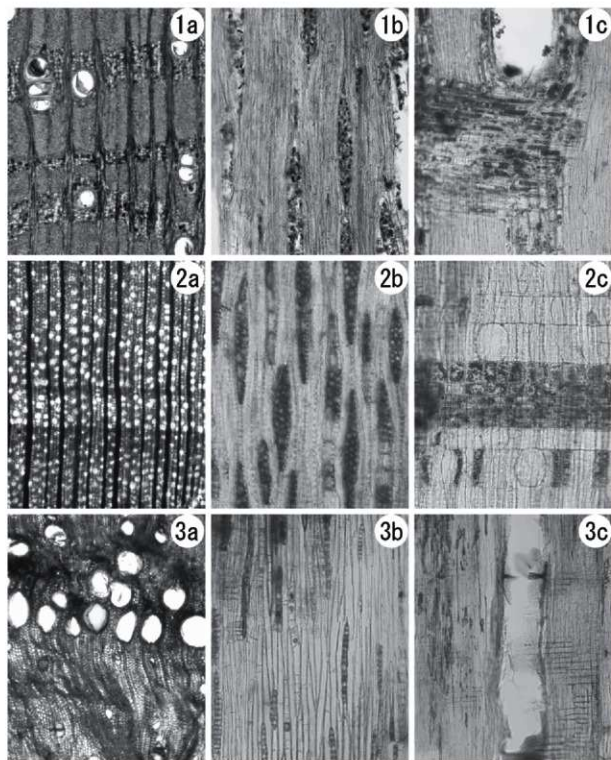
4. 考察

1号溝北端のNo.1はムクノキであった。状態が悪く、器種は不明である。同じ1号溝北端のNo.2はツバキ属であった。表面が摩耗しているが、加工木の可能性もある。なお、放射性炭素年代測定の結果によれば、1号溝北端のNo.1は弥生時代中期初頭～中期前半、No.2は弥生時代中期初頭および中期後半に相当する暦年代を示した。ムクノキとツバキ属は暖帯～温帯に分布する広葉樹であり、弥生時代中期には遺跡の周辺に生育していた樹木であると考えられる。

1号溝南側の上層一括から出土したNo.3はネムノキであった。放射性炭素年代測定の結果によれば、江戸時代中期および江戸時代後期～大正時代に相当する暦年代を示しており、新しい時期の試料であった。

参考文献

平井信二（1996）木の百科，394p，朝倉書店。



スケール： 

写真4 山ノ神(二串)遺跡出土材の光学顕微鏡写真

1a-1c. ムクノキ (No 1) 、2a-2c. ツバキ属 (No 2) 、3a-3c. ネムノキ (No 3)

a: 横断面 (スケール= 250 μ m) , b: 接線断面 (スケール= 100 μ m) , c: 放射断面 (スケール= 100 μ m)

(2) 放射性炭素年代測定

株式会社バレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

1. はじめに

日田市に所在する山ノ神（二串）遺跡から出土した木材について、加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を行った。

2. 試料と方法

試料は、1号溝北端から出土した木材が2点（試料 No.1：PLD-30402、試料 No.2：PLD-30403）と、1号溝南側の上層一括から出土した木材が1点（試料 No.3：PLD-30404）の、計3点である。試料 No.1 と No.2 は最終形成年輪が残存していない部位不明の木材、試料 No.3 は辺材が残る木材である。調査所見によれば、遺構の時期は弥生時代後期～古墳時代初頭と推測されている。

測定試料の情報、調製データは表3のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計（バレオ・ラボ、コンパクト AMS:NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた 14C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、14C 年代、暦年代を算出した。

第3表 測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-30402	遺構：1号溝 位置：北端 試料 No.1	種類：生材（ムクノキ） 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 状態：wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸： 1.2N）
PLD-30403	遺構：1号溝 位置：北端 試料 No.2	種類：生材（ツバキ属） 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 状態：wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸： 1.2N）
PLD-30404	遺構：1号溝南側 位置：上層一括 試料 No.3	種類：生材（ネムノキ） 試料の性状：最終形成年輪以外（辺材） 状態：wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸： 1.2N）

3. 結果

表4に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}C$ ）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した 14C 年代を、図29に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

14C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。14C 年代 (yrBP) の算出には、14C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した 14C 年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の 14C 年代がその 14C 年代誤差内に入る確率が 68.2% であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の 14C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された 14C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の 14C 濃度の変動、および半減期の違い（14C の半減期 5730 \pm 40 年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

14C年代の暦年較正にはOxCal4.2(較正曲線データ: IntCal13)を使用した。なお、1 σ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された14C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2 σ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は14C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

第4表 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-30402 1号溝北端 No.1	-26.47 \pm 0.17	2234 \pm 20	2235 \pm 20	366-354 cal BC (10.6%) 292-231 cal BC (57.6%)	381-348 cal BC (19.0%) 318-207 cal BC (76.4%)
PLD-30403 1号溝北端 No.2	-25.78 \pm 0.16	2134 \pm 20	2135 \pm 20	201-157 cal BC (53.6%) 134-116 cal BC (14.6%)	347-319 cal BC (7.3%) 207-92 cal BC (88.1%)
PLD-30404 1号溝南側上層一括 No.3	-27.67 \pm 0.17	82 \pm 19	80 \pm 20	1700-1720 cal AD (17.0%) 1819-1833 cal AD (12.3%) 1880-1915 cal AD (38.7%)	1694-1728 cal AD (25.1%) 1812-1919 cal AD (70.3%)

4. 考察

以下、各試料の暦年較正結果のうち2 σ 暦年代範囲(確率95.4%)に着目して結果を整理する。なお、弥生時代の暦年代については藤尾(2009)を参照した。

1号溝北端出土の試料No.1(PLD-30402)は381-348 cal BC(19.0%)および318-207 cal BC(76.4%)で、弥生時代中期初頭～中期前半に相当する。また、試料No.2(PLD-30403)は、347-319 cal BC(7.3%)および207-92 cal BC(88.1%)で、弥生時代中期初頭および中期後半に相当する。調査所見による遺構の推定時期は弥生時代後期～古墳時代初頭であり、試料No.1(PLD-30402)と試料No.2(PLD-30403)はどちらも遺構の推定時期よりもやや古い年代を示した。

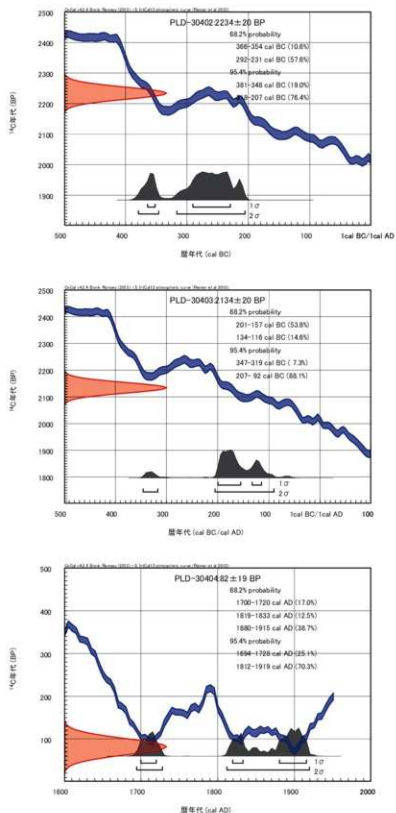
1号溝南側の上層一括から出土した試料No.3(PLD-30404)は、1694-1728 cal AD(25.1%)および1812-1919 cal AD(70.3%)であった。これは17世紀末～18世紀前半もしくは19世紀前半～20世紀前半で、江戸時代中期か江戸時代後期～大正時代に相当する。調査所見による遺構の推定時期は弥生時代後期～古墳時代初頭であり、試料No.3(PLD-30404)は遺構の推定時期よりもかなり新しい年代の木材であった。

今回の試料のうち、試料No.1とNo.2は最終形成年輪を欠く部位不明の木材である。木材の場合、最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると、最終形成年輪から内側であるほど古い年代が得られる(古木効果)。したがって、年代測定の結果が古木効果の影響を受けて、木材が枯死もしくは伐採された年代よりもやや古い年代を示している可能性がある。試料No.3は辺材が残っており、測定試料は枯死もしくは伐採年代に近い年代を示している。

引用・参考文献

- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.
- 藤尾慎一郎(2009)弥生時代の実年代。西本豊弘編「新弥生時代のはじまり第4巻 弥生農耕のはじまりとその年代」: 9-54, 雄山閣。
- 中村俊夫(2000)放射性炭素年代測定法の基礎。日本先史時代の14C年代編集委員会編「日本先史時代の14C年代」: 3-20, 日本第四紀学会。
- Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hafflidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F.,

Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J.(2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0–50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55(4), 1869–1887.



第 29 圖 曆年較正結果

第6章 総括

前章までに君迫遺跡と山ノ神(二串)遺跡の調査内容について述べてきた。最後に簡単ではあるが、確認された遺構の時期(1)やその性格などについて述べ、まとめたい。

(1) 君迫遺跡

今回の調査で出土した遺物のうち、1号溝状遺構からは、土師質土器環(第12図1)や同安溪青磁皿(第12図7)が出土している。青磁皿は12世紀後半、土師質土器環は、内面に渦状ナデがない点や体部の開きなど、Ⅵ期(16世紀前半)と考えられ、時期に幅がある。しかし、中央落ち込みからも土師質土器碗が出土しており(第12図3・6)、内湾気味の体部形態などからⅤ期(15世紀末から16世紀初頭)に相当し、埋め立てた時期や掘立柱建物を建てた時期は15世紀末から16世紀前半と推定することができる。

次に遺構の性格について考えるが、その上で参考になる事例として、市内天瀬町馬原に所在する寺ヶ迫遺跡が挙げられる。この遺跡では、15世紀中頃から16世紀中頃の掘立柱建物などが確認されており、建物の建築場所を確保するため、尾根の斜面を埋め立てて点が特徴として挙げられる。さらに出土遺物が少ない点などから一般的集落ではなく、特殊な状況下で使用されたと考えられている。

本遺跡においても、出土遺物が極端に少ないことから、通常の集落と考えにくく、さらに谷状の落ち込みを埋め立てて建物を建てている点など、寺ヶ迫遺跡の状況と類似していることが指摘できる。具体的な性格まで言及はできないが、調査地付近が特別な空間で、祭祀など非日常的な場として利用されていた可能性が考えられる。

(2) 山ノ神(二串)遺跡

まず、土坑についてみていく。2号土坑については、遺物が出土しておらず、切り合い関係もないため、時期は不明である。5号土坑については、埋土中から出土した土師器甕(第15図1)から時期が分かる。この甕は口縁端部を内側につまみ出す点や、外面到部下に横ハケを施している点、底部形態などから、古墳時代前期前半の範疇で捉えられるものである。

この土坑の性格については、ほぼ直立する断面形やごく少量であるが、木片が出土していることから、井戸の可能性が考えられる。そして、床面より約40cm上において、ほぼ真逆位の状態で出土した甕は、明らかに意図されて掘えられたものと捉えることができ、井戸を埋める過程での祭祀行為等に利用されたと考えられる。

続いて、溝状遺構については、第4章でも述べたように土層の堆積状況などから4条とも水路としての機能が想定される。さらに1・2号溝状遺構の北側では、多くの杭痕が検出されている状況から堰の存在が想定され、調査地北側にあたる上流域や北西側にある谷からの湧水を利用したものと考えられる。

次に各溝状遺構の時期をみていく。1号溝状遺構から出土した遺物は、弥生土器を中心に、土師器・須恵器・青磁のほか、石器も多くある。出土状況を見ると、北側のAグリッド・Bグリッド付近と南側のLグリッド・Mグリッドで弥生土器が中心に多く出土しており、その間のグリッドからの出土は少ないという傾向がある。

土器のうち、弥生土器は中期7期の甕(第18図6)、後期2期の壺(第19図4)、後期4期の甕(第18図1・2)など、中期末から後期を通じての遺物が見られる。

また、ⅢB期の土師器高坏(第20図23)、同じくⅣ期の高坏(第20図24)、TK 23～47型式の須恵器蓋坏(第20図12・13)など古墳時代中期から後期の遺物が下層より出土している。

この溝状遺構では、いずれの土層の堆積状況からも掘り直しの痕跡が見られなかったことや、弥生時代から古墳時代の土器が上層・下層の両方から出土しており、少なくとも古墳時代中期から後期頃までは水路として機能

していた可能性がある。

なお、8世紀前半頃の須恵器高台付椀(同図14)、12世紀後半頃の同安窯系の青磁皿(同図25)などが出土しているが、これらは上層からの出土である。このことから古墳時代後期以降、8世紀頃までには、埋没が始まり、その過程で緩やかな窪みを呈していた部分にこれらの遺物が流れ込んだものと考えられる。

また、1号溝状遺構より出土した木材の放射性炭素年代測定の結果から、試料1・2は弥生時代中期に相当することが判明しており、出土遺物の最も古い時期のものに近い時期を示している。また試料3は、江戸時代中期もしくは江戸時代後期から大正時代の年代を示すものであるが、1号溝状遺構を切っている小ピット列の埋土が比較的新しいものと判断できたことから、これに近い時期のもの可能性が考えられる。

2号溝状遺構については、1号溝状遺構と切り合っているものの、その前後関係は判断しにくい。しかし出土遺物は、Ⅲ期の高環脚部を転用した鞆羽口(第25図6)、鉢形甕(同図8)やⅦ期の土師器裏(同図5)、TK43型式の須恵器の坏身・高環・ハソウ(同図2~4)など、古墳時代中期から後期のものが出土しており、1号溝状遺構より新しい可能性がある。なお、これらの遺物はほとんどが上層からの出土であり、埋没の過程で流れ込んだ可能性が高い。

3・4号溝状遺構は、遺物が出土していないことから、詳細な時期を断定できないが、1・2号溝状遺構を切っていることから、少なくとも古墳時代後期以降としておきたい。

1・2号溝状遺構から出土した土器は、器面が摩耗しているものが多くみられ、流れ込みによるものと判断される。調査地周辺では、集落は確認されていないものの、現在の集落がある調査地西側の台地裾や北側の上流域に存在したと考えられる。そして、東側は調査地と二串川との間に水田が広がっていた可能性があり、溝状遺構を水路として利用したものと思われる。

つまり、今回の調査地付近は、西側の台地裾から東側へ向かって、集落、溝状遺構(水路)、水田、二串川という、現在とほぼ同じ景観であったと考えられる。

註

(1) 遺物の時期の判断に当たっては、以下の報告・論文等を参考にした。

弥生土器：渡邊隆行編『吹上VI—自然科学分析調査の記録—調査の総括—』日田市埋蔵文化財調査報告書第112集
(市内遺跡発掘調査報告13) 日田市教育委員会 2014

土師器：重藤輝行「筑前・筑後の須恵器出現以後の土器」『山口県の古墳時代土器編年を考える』山口県考古学フォーラム 2008

重藤輝行「北部九州における古墳時代中期の土師器編年」『古文化談叢』第63集 九州古文化研究会 2010
柳田康雄「3・4世紀の土器と鏡」『森貞次郎博士古稀記念 古文化論集』同論文集刊行会 1982

須恵器：田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981

土師質土器：渡邊隆行『慈明山遺跡7次』日田市埋蔵文化財調査報告書第95集 日田市教育委員会 2010

陶磁器：中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社 1995

(2) 行時桂子『寺ヶ迫遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第90集 日田市教育委員会 2010

第5表 出土遺物観察表(1)

調査番号	出土遺物	種別	図解	法量 (cm)				製 型		胎 土	焼成	色 調				備 考	
				口径	高さ	底径	取柄長	内 面	外 面			内面(裏)	裏	外面(表)	裏		
君島遺跡																	
第12901	1号	土師質土器	杯	-	11.5	6.4	-	ヨコナデ+ナデ	ナデ	A・C・D	良	褐色	2.5YR7/6	褐色	2.5YR7/6	内面に灰白色	
第12902	1号	土師質土器	杯	-	11.2	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	A・C・D	良	褐色	2.5YR7/6	褐色	2.5YR7/6	内面に灰白色	
第12903	中央部5点込み	土師質土器	杯	-	11.1	-	-	不明	不明	A・C・D・E	良	褐色	2.5YR6/5	褐色	2.5YR6/5	-	
第12904	1号	土師質土器	杯	-	11.2	7.7	-	不明	不明	A・C・D・E	良	濃い褐色	10YR7/3	濃い褐色	10YR7/4	-	
第12905	1号	土師質土器	杯	-	11.3	-	-	不明	不明	A・C・D	良	褐色	2.5YR7/6	褐色	2.5YR7/6	-	
第12906	中央部5点込み7層	土師質土器	杯	-	10.5	-	-	不明	不明	A・C・E	良	濃い褐色	10YR6/4	濃い褐色	10YR6/4	-	
第12907	1号	青磁	皿	-	12.3	-	-	磨物	磨物	緑青	良	青緑色	-	青緑色	-	同定済	
第12908	中央部5点込み	土師質土器	大鉢	-	12.4	-	-	ヨコナデ	ナデ	A・C・E	良	濃い褐色	10YR7/3	濃い褐色	10YR7/3	-	
山ノ神(二重)遺跡																	
第18001	51	下層	土師器	甕	16.6	24.1	-	21.9	ヨコナデ+ナデ、 胎土オモエナデ式	ヨコナデ+ハウ白	A・C・E	良	濃い褐色	10YR7/4	濃い褐色	10YR7/4	内面に灰白色
第18001	1号	M1上層、L1上層	赤土土器	瓶	8.7	4.0	-	-	胎オモエ	胎オモエ	D・E・F	良	灰白色	10YR8/1	灰白色	10YR8/1	内面に灰黒色
第18002	1号	L2、土師器、下層	赤土土器	磨片器	13.2	22.6	10.0	15.5	ヨコナデ+胎オモエ ナデ+胎オモエ	ヨコナデ+工具ナ デ+胎オモエ	A・C・D・E	良	灰白色	10YR7/3	濃い褐色～ 土色、褐色	10YR7/2～ 3.0YR7/4	内面に灰黒色
第18003	1号	下層、表層	赤土土器	甕	15.0	13.3	-	14.0	ヨコナデ+ナデ	ヨコナデ+工具ナ デ+ナデ	A・C・D・E	良	灰白色	2.5YR7/1	濃い褐色	10YR7/2	-
第18004	1号	A2上層	赤土土器	甕	14.0	11.6	-	15.8	ヨコナデ+ナデ	ヨコナデ+ナデ	A・C	良	黒赤褐色～ 灰白色	5YR3/4～ 10YR8/2	灰白色	10YR8/2	-
第18005	1号	A27層、上層、中層	赤土土器	甕	129.2	13.7	-	-	ハウ白+ナデ	胎オモエ、ヨコナ デ+ハウ白	A・C	良	灰褐色	10YR4/2	灰褐色	10YR4/2	-
第18006	1号	L27層	赤土土器	甕	133.0	10.9	-	-	ヨコナデ+胎オモエ ナデ+ハウ白	ヨコナデ+ハウ白	D・E	良	灰白色	2.5YR2	灰白色～濃い 赤褐色	2.5YR2～ 10YR5/3	-
第18007	1号	A2	赤土土器	甕	129.6	17.6	-	-	ハウ白+ナデ	ヨコナデ+ハウ白	E・F	良	灰白色	2.5YR2	灰白色	2.5YR2	-
第18008	1号	上層	赤土土器	甕	-	10.9	-	-	ハウ白	ハウ白+ヨコナデ	A・C・E	良	灰白色	10YR6/2	灰白色	10YR6/2	-
第18009	1号	B2	赤土土器	甕	-	12.2	-	-	ハウ白+ヨコナデ	ヨコナデ+ハウ白	A・C・E	良	濃い褐色	10YR7/2	濃い褐色	10YR7/3	-
第18010	1号	上層	赤土土器	甕	-	14.8	-	-	ハウ白	ハウ白+ヨコナデ	A・E	良	灰白色	2.5YR2	濃い褐色	10YR7/2	-
第18011	1号	M1	赤土土器	甕	-	14.3	5.0	-	ハウ白	工具ナデ	A・C・D・E	良	浅褐色	10YR6/3	浅褐色	10YR6/3	内面に灰黒色
第18012	1号	L2	赤土土器	甕	-	15.0	7.7	-	工具ナデ	ナデ	A・E	良	濃い褐色～ 灰褐色	2.5YR7/2～ 2.5YR4/2	褐色	2.5YR7/6	-
第18013	1号	K2、土師器、上層	赤土土器	甕	-	16.0	6.4	-	工具ナデ	(上層)ナデ	A・C・D・E	良	灰白色	10YR8/2	黒褐色～灰白色	10YR2/1～ 10YR6/1	内面に灰黒色
第18014	1号	中層	赤土土器	甕	-	14.0	7.2	-	ハウ白+ナデ	ハウ白	A・C・E・F	良	灰褐色	10YR6/2	灰褐色	10YR6/2	-
第18015	1号	M1上層	赤土土器	磨部のみ	-	16.0	18.2	-	ヨコナデ+不明	不明	A・C・D・E	良	褐色	5YR7/6	褐色	2.5YR7/6	磨付済
第18016	1号	L2上層	赤土土器	磨部のみ	-	15.0	12.0	-	ナデ+ハウ白	ハウ白+ヨコナデ	A・C・E	良	浅褐色	10YR6/3	浅褐色～土色 ～浅褐色	10YR6/3～ 10YR5/3	磨付済
第18017	1号	A2	赤土土器	甕	7.0	6.7	-	6.7	胎オモエ+ナデ	胎オモエ+ナデ	E	良	浅褐色	10YR6/3	浅褐色	10YR6/3	-
第18022	1号	L2上層	赤土土器	甕	112.2	11.6	-	117.2	磨部+ハウ白	磨部+ハウ白	A・C・E	良	濃い褐色～ 灰褐色	10YR7/2～ 10YR4/1	濃い褐色	10YR7/2	内面に灰黒色
第18003	1号	上層、下層	赤土土器	甕	112.0	11.8	-	-	ヨコナデ+工具 ナデ+胎オモエ ナデ+胎オモエ	ヨコナデ+工具ナ デ	A・E	良	褐色	10YR4/1	灰白色	10YR7/1	-
第18004	1号	M1上層	赤土土器	甕	126.0	11.1	-	-	磨部のため磨部 不明	磨部のため磨部 不明	D・E・F	良	灰白色～ 黒褐色	10YR7/1～ 10YR2/1	灰白色	10YR6/1	-
第18005	1号	L2上層	赤土土器	甕	115.6	17.0	-	-	工具ナデ(ハウ 白)+ナデ	ヨコナデ+工具ナ デ(ハウ白)+ ハウ白	A・C・D・E	良	灰白色	10YR8/2	灰白色	10YR8/2	-
第18006	1号	A2	赤土土器	甕	-	11.0	-	-	ハウ白	ハウ白+ヨコナデ	A・C	良	濃い褐色	10YR7/3	浅褐色	10YR8/3	内面に灰黒色
第18007	1号	L2	赤土土器	甕	-	15.1	-	-	ハウ白	ハウ白+ヨコナ デ+不明	A・E	良	灰白色	2.5YR2	灰白色	2.5YR2	-
第18008	1号	下層	赤土土器	甕	-	18.2	-	-	ハウ白	ヨコナデ	C・E	良	灰白色	10YR8/2	灰白色	10YR8/2	-
第18009	1号	上層	赤土土器	甕	-	13.5	-	-	磨部	磨部+ハウ白	A・C・E	良	灰白色	10YR8/2	灰白色	10YR8/2	磨付
第18010	1号	(土師器)	赤土土器	甕	-	18.0	5.8	-	ハウ白+ナデ	ナデ	A・C・E	良	濃い褐色	2.5YR5/4	濃い褐色	2.5YR5/4	内面に灰黒色
第18011	1号	B2	赤土土器	甕	-	14.1	6.4	-	ナデ+胎オモエ	ハウ白+不明胎土 ナデ	A・C・D	良	浅褐色	10YR6/4	浅褐色	10YR6/4	内面に灰黒色
第18012	1号	A27層、土師器	赤土土器	甕	-	128.5	-	126.0	ハウ白+胎オモエ	ハウ白+ヨコナデ	A・E・H	良	浅褐色	10YR6/3	浅褐色	10YR6/3	-
第18013	1号	下層	赤土土器	磨部のみ	-	13.0	-	-	工具ナデ+胎オモ エナデ	胎オモエナデ	A・C・D	良	褐色	5YR7/1	褐色	10YR6/6	-
第18012	1号	下層	赤土土器	磨部のみ	-	16.0	-	-	ナデ+磨部	ナデ+磨部のため 不明	A・C・E	良	灰白色	10YR8/2	灰白色	2.5YR8/1	-
第18013	1号	A2	赤土土器	高片器	-	17.3	-	-	土師器	工具ナデ	A・C・E	良	浅褐色	2.5YR6/3	浅褐色	2.5YR8/3	-
第18014	1号	下層	赤土土器	高片器	-	14.7	13.0	-	磨部のため磨部 不明	磨部のため磨部 不明	D・E	良	褐色	5YR7/6	褐色	2.5YR7/6	磨付+磨付済
第18015	1号	L1	赤土土器	甕	10.0	15.1	10.8	-	胎オモエナデ	胎オモエナデ	A・B	良	浅褐色	10YR8/3	浅褐色～灰白色	5YR8/4～ 2.5YR8/2	-
第18016	1号	B2上層、中層、下層、土師器、上層	赤土土器	磨付	13.5	14.7	-	-	工具ナデ+胎オモ エ+土師器	工具ナデ	A・E	良	褐色～浅褐色	5YR7/6～ 10YR6/3	褐色～浅褐色	5YR7/6～ 10YR6/3	-

第6表 出土遺物観察表(2)

調査番号	出土遺物	種別	図解	法量 (cm)				製 型		胎 土	製造	色 調				備 考	
				口径	高さ	底径	取柄径	内 面	外 面			内面(裏)	Hue	外面(裏)	Hue		
R20087	1編 中核、下層	赤生土層	器台	-	8.5	10.8	-	-	上具ナデ+ナデ	上具ナデ+ナデ	A+E	黒	にじみ・褐色	7.5YR5/4	にじみ・褐色	7.5YR7/4	
R20088	1編 上層	赤生土層	土器	0.9	9.6	10.0	-	-	胎オサエ+ナデ	ナデ+タタキ	A+C+E	黒	灰白色	10YR8/1	灰白色	10YR6/1	
R20089	1編 上層、下層	赤生土層	土器	8.5	8.6	10.1	-	-	胎オサエ+ナデ	ナデ+上具ナデ、胎オサエ	A+C	黒	浅褐色	7.5YR6/4	浅褐色	7.5YR8/4	
R200910	1編 上層、E2上層	赤生土層	土器	8.5	9.6	9.2	-	-	胎オサエ+ナデ	胎オサエ+ナデ	B+C	黒	灰白色	10YR8/2	浅褐色	7.5YR8/2	
R200911	1編 上層B	赤生土層	ミニチュア	4.0	4.5	2.1	-	-	胎オサエ+ナデ	胎オサエ+ナデ	A+C+E	黒	にじみ・褐色	10YR6/4	にじみ・褐色	10YR6/4	
R200912	1編	黄褐色層	器台	-	13.7	-	-	-	胎輪ナデ	胎輪ナデ+胎輪ヘ タタキ	F	黒	灰白色	N7/	灰白色	N7/	
R200913	1編	黄褐色層	器台	11.8	10.4	-	-	-	胎輪ナデ	胎輪ナデ+胎輪ヘ タタキ	F	黒	灰白色	N7/	灰白色	N7/	受け取付(3.6cm)
R200914	1編	黄褐色層	高台付杯	-	12.1	8.8	-	-	胎輪ナデ+ナデ	胎輪ナデ	E+F	黒	灰白色	N7/	灰色	N6/	
R200915	1編 下層	黄褐色層	土器	-	15.0	-	-	-	胎輪ナデ	胎輪ナデ	E	黒	灰色	N4/	灰色	N4/	横断的欠文 取付あり
R200916	1編 E3	土器層	瓶	10.2	4.8	-	-	-	上具ナデ+上具脚	ココナデ+上具ナ デ	A+E	黒	にじみ・褐色	10YR7/2	にじみ・褐色	10YR7/3	
R200917	1編 下層	土器層	甕	10.8	17.1	-	-	-	ハケ目+タタキ	ハケ目+上具ナデ	C-D+E	黒	にじみ・褐色	10YR6/4	にじみ・褐色	10YR7/2	
R200918	1編	土器層	甕	-	11.2	-	13.3	-	タタキ	ココナデ+ハケ 目+タタキ	A+C-D+E	黒	にじみ・褐色 黒褐色	10YR7/2 7.5YR3/1	褐色・黒褐色	2.5YR6/1 7.5YR3/1	内面にタタキ付
R200919	1編 下層	土器層	甕	25.9	13.9	-	-	-	ココナデ+タタキ	ココナデ+上具ナ デ	A+C	黒	にじみ・褐色	7.5YR7/2	灰白色	7.5YR8/2	
R200920	1編 下層	土器層	甕	23.8	17.0	-	-	-	厚板のたため調整 有	ココナデ+タタキ	A+C-D-F	黒	緑褐色	5YR8/4	灰黒褐色	10YR5/2	
R200921	1編	土器層	甕	9.2	9.2	-	9.3	-	ハケ目+胎オサ エ+胎ナデ	不明確+ハケ目 ココナデ+ナデ	C-E	黒	にじみ・褐色	10YR7/2	灰白色	10YR7/2	小型丸底甕 内面にタタキ付
R200922	1編 下層	土器層	甕	-	17.1	-	-	-	ナデ+胎オサエ ナデ+ハケ目+タ タキ	ナデ+ハケ目+タ タキ	A+E	黒	にじみ・褐色 灰白色	5YR7/3 10YR8/2	灰白色	2.5YR6/3	小型丸底甕 内面にタタキ付
R200923	1編 A2上層、下層	土器層	高形頸部	16.5	16.1	-	-	-	ココナデ+ハケ目	ココナデ+不明確	A+C-D	黒	明褐色	2.5YR5/6	明褐色・浅黄 褐色	2.5YR4/6 7.5YR6/3	
R200924	1編 上層B上層	土器層	高形頸部	-	18.8	14.2	-	-	ナデ+タタキ+コ コナデ	ハケ目+ナデ+コ コナデ	A+C-E	黒	にじみ・褐色 黒褐色	7.5YR7/4 2.5YR6/6	にじみ・褐色 黒褐色	7.5YR7/4 2.5YR6/6	
R200925	1編	青褐色層	瓶	-	10.8	14.0	-	-	-	-	-	-	オリーブ黄	5Y6/3	オリーブ黄	5Y6/3	
R200926	1編 2	赤生土層	器台	17.8	14.2	-	-	-	ココナデ+ナデ、 ハケ目	ココナデ+ナデ、 上具脚	A+C-E	黒	灰黒褐色	10YR6/1	にじみ・褐色	10YR7/2	
R200927	2編 上層	黄褐色層	器台	12.8	13.0	-	-	-	胎輪ナデ	胎輪ナデ	E	黒	灰白色	N7/	灰色	N6/	受け取付(4.8cm)
R200928	2編	黄褐色層	高形頸部	-	9.1	-	-	-	胎輪ナデ+胎輪し ぼり筋	胎輪ナデ	E	黒	青灰色	5B5/1	青灰色	5B5/1	溝が一部残存
R200929	2編 2	黄褐色層	瓶	-	15.7	-	11.0	-	胎輪ナデ	胎輪ナデ	E	黒	灰白色	N7/	灰色	7.5Y5/1	内面に自然釉がかる 内面にタタキ付、底欠文
R200930	2編 2	土器層	甕	17.0	13.2	-	-	-	ココナデ+ナデ、 タタキ	ココナデ+ハケ目 タタキ	A+C-D	黒	にじみ・褐色 灰白色	7.5YR7/3 7.5YR4/2	にじみ・褐色 灰白色	7.5YR7/3 7.5YR4/2	
R200931	2編 2	土器層	高形頸部	-	11.1	11.9	-	-	タタキ+ココナデ	上具ナデ+ココナ デ	A+C	黒	浅褐色	10YR8/3	浅褐色	10YR8/3	フイコ付、底筋、 付付物あり
R200932	2編 上層	土器層	高形頸部	-	17.6	10.7	-	-	しぼり筋+ハケ目	ナデ+不明確	A+C	黒	灰白色	10YR8/2	灰白色	10YR8/2	
R200933	2編 上層、土層B	土器層	斜形甕	13.4	10.2	11.0	-	-	胎オサエ+タタキ	胎オサエ+上具ナ デ+ナデ	A+C-E	黒	褐色 灰黒褐色	7.5YR4/3 10YR6/2	にじみ・褐色 黒褐色	10YR7/2 10YR5/1	内面にタタキ付
R200934	2編 上層	土器層	瓶形甕	-	19.1	-	-	-	上具ナデ	胎オサエ+ナデ	A+C	黒	にじみ・褐色	7.5YR7/4	にじみ・褐色	7.5YR7/4	内面に黒褐色あり 上層部に黒褐色あり
R200935	2編 上層	土器層	ミニチュア	4.4	2.7	-	-	-	胎オサエ	胎オサエ	A+C	黒	浅褐色	7.5YR6/3	浅褐色	7.5YR6/3	
R200936	2編 2	土器層	ミニチュア	2.0	2.9	-	-	-	胎オサエ+ナデ	胎オサエ+ナデ	A+C	黒	灰白色	10YR7/1	灰白色	10YR7/1	
R200937	2編	土器層	ミニチュア	4.6	3.2	-	-	-	胎オサエ+ナデ	胎オサエ+ナデ	A+C	黒	にじみ・褐色 黒褐色	7.5YR7/4 7.5YR5/2	にじみ・褐色 黒褐色	7.5YR7/4 7.5YR5/2	ほぼ球形
R200938	2編 2	土器層	ミニチュア	3.4	3.2	-	-	-	胎オサエ	胎オサエ	A+C-E	黒	褐色	5YR5/6	褐色	5YR6/6	
R200939	2編 2	土器層	ミニチュア	-	13.8	2.2	-	-	胎オサエ+ナデ	胎オサエ+ナデ	A+C-D	黒	灰白色	10YR8/1	灰白色	10YR8/1	内面に黒褐色あり
R200940	1編 2	土層	E2上層	-	14.1	-	-	-	胎輪ナデ+ナデ	胎輪ナデ+胎輪ヘ タタキ	F	黒	薄灰色	5B6/1	暗青灰色	5B7/1	受け取付(4.3cm) 内面に自然釉がかる
R200941	1編 2	土層	E2上層	-	17.8	16.4	-	-	ココナデ+タタキ	ココナデ+ハケ目	A+C	黒	にじみ・褐色	10YR7/2	にじみ・褐色	10YR7/2	
R200942	1編 2	土層	E2上層	-	14.7	12.0	-	-	上具ナデ+胎オサ エ+ナデ	上具ナデ+タタ キ+ナデ	E	黒	灰白色	10YR8/2	灰白色	10YR8/2	
R200943	1編 2	土層	E2上層	-	16.2	9.9	11.3	-	ナデ+しぼり筋+ ココナデ	ナデ+上具脚+コ コナデ	A+C-E	黒	褐色	7.5YR4/3	にじみ・褐色	7.5YR7/4	
R200944	1編 2	黄褐色層	甕	7.8	12.8	-	-	-	胎輪ナデ	胎輪ナデ	E	黒	灰色	N6/	灰色	N6/	内面に自然釉がかる
R200945	1編 2	黄褐色層	甕	-	13.6	-	-	-	胎輪ナデ	胎輪ナデ+胎輪ヘ タタキ	E+F	黒	灰色	N5/	灰色	N5/	
R200946	1編 2	黄褐色層	甕	-	16.2	-	-	-	胎輪ナデ	胎輪ナデ+胎輪ヘ タタキ	E+F	黒	灰色	N5/	灰色	N5/	内面に自然釉がかる
R200947	1編 2	黄褐色層	甕	-	13.7	-	-	-	胎輪ナデ	胎輪ナデ+胎輪し ぼり筋	E	黒	灰色	N4/	灰色	N4/	
R200948	1編 2	黄褐色層	甕	16.0	15.2	-	-	-	胎輪ナデ	胎輪ナデ+タタキ	E	黒	灰色	N5/	灰色	N5/	
R200949	1編 2	黄褐色層	高台付杯	-	12.5	18.8	-	-	胎輪ナデ+ナデ	胎輪ナデ	E	黒	灰白色	N7/	灰白色	N7/	
R200950	1編 2	黄褐色層	高台付杯	-	11.8	15.2	-	-	胎輪ナデ+ナデ	胎輪ナデ	E	黒	オリーブ黄	5Y6/3	オリーブ黄	5Y6/3	龜裂発生
R200951	1編 2	黄褐色層	高台付杯	-	12.5	18.8	-	-	胎輪ナデ+ナデ	胎輪ナデ	E	黒	灰白色	N7/	灰白色	N7/	
R200952	1編 2	赤生土層	器台	17.2	10.3	-	-	-	ココナデ+ナデ	ココナデ+ハケ目	A+B+C-E	黒	灰白色	10YR8/1	灰白色	10YR8/2	

胎土：A内褐色、B石灰、C黒色、D赤褐色、E白色粘土、F黒色粘土、G黄砂、H砂鉄、I褐色粘土
また胎土は、確認された量から帰らされていく。

第7表 出土遺物観察表(3)

採図番号	出土遺構	器種	法 量 (cm)			重 さ (g)	材 質	備 考
			最大長	最大幅	最大厚			
君道遺跡								
第12図9	一括		割片	3.90	2.60	1.20	6.60	黒曜石 西北九州産
山ノ神(二申)遺跡								
第21図1	1溝		割片	4.20	2.30	0.75	4.50	黒曜石 西北九州産
第21図2	1溝	A2上層	割片	3.65	1.35	0.65	3.25	黒曜石 郷島産
第21図3	1溝	下層	割片	2.90	1.45	0.60	2.68	黒曜石 西北九州産
第21図4	1溝		打製石鏃	3.05	1.40	0.35	1.14	サヌカイト
第21図5	1溝	下層	打製石鏃	(1.95)	1.15	0.25	0.57	サヌカイト
第21図6	1溝	中層	打製石鏃	(2.60)	1.80	0.40	1.50	黒曜石 郷島産
第21図7	1溝	下層	打製石鏃	(1.80)	1.85	0.40	1.14	サヌカイト
第21図8	1溝	上層	石匙	3.60	4.95	1.00	14.96	安山岩
第21図9	1溝		石匙	(4.05)	2.55	0.40	5.51	安山岩
第21図10	1溝	中層	打製石斧	(14.55)	6.80	2.40	300.83	片岩
第21図11	1溝	N1上層	打製石斧	(11.65)	6.65	1.15	124.52	片岩
第22図1	1溝	中層	打製石斧	(5.85)	(6.70)	1.10	50.19	片岩
第22図2	1溝		打製石斧	(8.00)	6.95	1.60	108.83	緑泥片岩
第22図3	1溝	上層	打製石斧	(8.65)	5.60	1.55	95.59	安山岩
第22図4	1溝		打製石斧	(8.20)	4.60	1.75	79.20	安山岩
第22図5	1溝	L2上層	打製石斧	(5.25)	5.85	1.15	45.44	安山岩
第22図6	1溝	下層	打製石斧	(6.75)	5.75	1.80	65.55	凝灰岩
第22図7	1溝	下層	打製石斧	5.60	(12.00)	1.90	154.74	片岩 未成品 石鏃の可能性がある
第22図8	1溝	中層	石包丁形石器	6.90	3.80	0.70	32.36	安山岩
第23図1	1溝	下層	石包丁	4.50	(9.45)	0.30	21.06	片岩
第23図2	1溝	下層	石包丁	(4.00)	(4.90)	(0.70)	22.30	粘板岩
第23図3	1溝	下層	石包丁	5.15	(7.50)	0.65	40.30	片岩
第23図4	1溝		石包丁	(4.40)	(7.40)	0.60	24.82	粘板岩
第23図5	1溝	下層	砥石	17.20	6.00	4.00	524.40	堆積岩
第23図6	1溝	K2下層	砥石	(8.70)	5.10	3.80	193.09	凝灰岩
第23図7	1溝		磨石	(8.15)	(4.10)	(5.50)	159.68	安山岩
第23図8	1溝	中層	礪?	6.30	6.10	2.80	229.65	鉄製品
第25図15	2溝	上層	小石刃	3.35	1.45	0.45	2.01	黒曜石 西北九州産
第25図16	2溝	土層⑤	小石刃	3.30	1.30	0.40	1.90	黒曜石 西北九州産
第25図17	2溝	上層	石匙	(2.75)	1.30	0.50	1.76	黒曜石 西北九州産
第25図18	2溝	E2	打製石斧	(8.00)	7.10	1.70	113.64	安山岩
第25図19	2溝	上層	碧玉	(2.80)	0.95	0.55	1.99	碧玉 孔径0.20cm
第28図10	一括		石核	7.40	6.45	4.10	203.10	黒曜石 西北九州産
第28図11	一括		石皿	9.50	9.40	6.70	665.00	安山岩
第28図12	一括		鉄鏃	(6.20)	1.30	1.15	18.05	鉄製品 茎部のみ



①調査地周辺空中写真(南から)



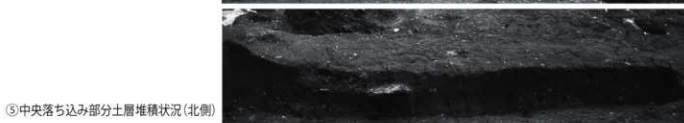
②中央落ち込み部分発掘状況(北西から)



③中央落ち込み部分発掘状況(北から)

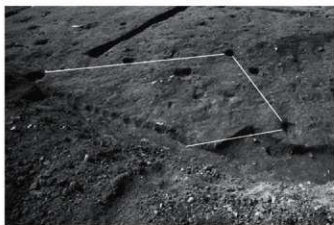


④中央落ち込み部分土層堆積状況(南側)



⑤中央落ち込み部分土層堆積状況(北側)

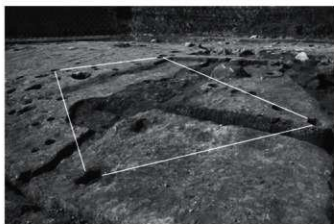
写真図版 2



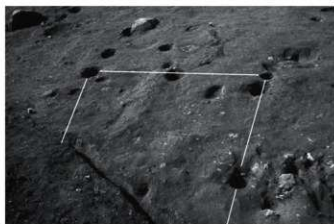
① 2号掘立柱建物発掘状況（北東から）



② 3号掘立柱建物発掘状況（北東から）



③ 5号掘立柱建物発掘状況（北東から）



④ 6号掘立柱建物発掘状況（北東から）



⑤ 土坑発掘状況（南から）



⑥ 1号溝状遺構発掘状況（北西から）



3号溝状遺構発掘状況（南東から）



4号溝状遺構発掘状況（北東から）



12-1



12-2



12-3



12-4



12-5



12-6



12-7



12-8



12-9



調査区全体写真（北東から）



調査区垂直写真（上が東）



① 2号土坑完掘状況（北東から）



② 5号土坑完掘状況（北東から）



③ 5号土坑土層堆積状況（南側）



④ 5号土坑遺物出土状況（北東から）



⑤ 1・2号溝状遺構完掘状況（北から）



① 1号溝状遺構（南側）完掘状況（北から）



② 1号溝状遺構発掘状況（南東から）



③ 1号溝状遺構発掘状況（北東から）



④ 1号溝状遺構遺物出土状況①（土層③付近）（南から）



⑤ 1号溝状遺構遺物出土状況②（土層⑥付近）（北から）



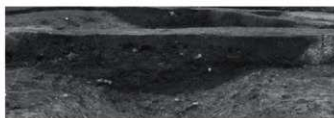
⑥ 1号溝状遺構杭痕検出状況①（東から）



⑦ 1号溝状遺構杭痕検出状況②



① 1号溝状遺構土層①堆積状況 (南側)



② 1号溝状遺構土層②堆積状況 (南側)



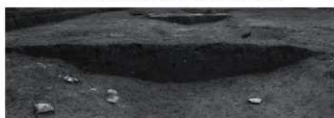
③ 1号溝状遺構土層④堆積状況 (南側)



④ 1号溝状遺構土層⑤堆積状況 (南側)



⑤ 1号溝状遺構土層⑥堆積状況 (南側)



⑥ 1号溝状遺構土層⑦堆積状況 (南側)



⑦ 1号溝状遺構土層⑧堆積状況 (北側)



⑧ 1号溝状遺構土層⑨堆積状況 (北側)



⑨ 1号溝状遺構土層⑩堆積状況 (北側)



⑩ 2号溝状遺構 A 土層①堆積状況 (南側)



⑪ 2号溝状遺構 A 土層②堆積状況 (南側)



⑫ 2号溝状遺構 A・B 完掘状況 (北から)

写真図版 8



① 2号溝状遺構 B 土層①堆積状況 (南側)



② 2号溝状遺構 B 土層②堆積状況 (南側)



③ 2号溝状遺構 A・B 土層④堆積状況 (南側)



④ 2号溝状遺構 B・C 土層⑤堆積状況 (北側)



⑤ 3号溝状遺構完掘状況 (南東から)



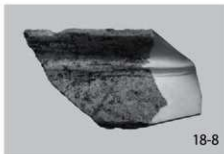
⑦ 4号溝状遺構完掘状況 (東から)

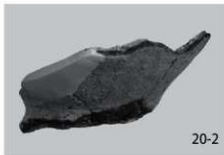
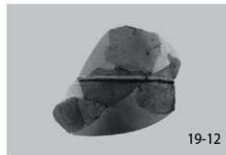
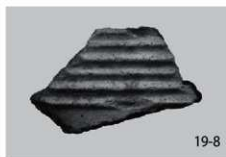


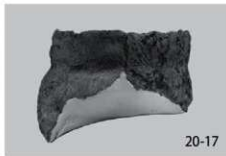
⑥ 3号溝状遺構土層堆積状況 (南側)

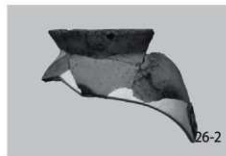


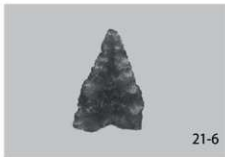
⑧ 4号溝状遺構土層堆積状況 (東側)













報告書抄録

ふりがな	あさひのいせき4 きみざこいせき・やまのかみ（にくし）いせきのちようさ
書名	朝日の遺跡Ⅳ 君迫遺跡・山ノ神（二串）遺跡の調査
副書名	県営経営体育成基盤整備事業朝日地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	（4）
シリーズ名	日田市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第125集
編著者名	若杉竜太、有限会社九州文化財リサーチ、株式会社パレオ・ラボ
編集機関	日田市教育庁文化財保護課
所在地	〒877-8601 大分県日田市田島2丁目6-1 0973(24)7171
発行年月日	2017年（平成29年）2月28日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
君迫遺跡 <small>あさひのいせき</small>	大分県日田市 大字二串 <small>あさひのいせき</small>	44204-6	204032	130° 54' 35"	33° 20' 9"	20130819 ～ 20131112	580㎡	記録保存 調査
山ノ神（二串） 遺跡 <small>やまのかみ</small>	大分県日田市 大字二串 <small>あさひのいせき</small>	44204-6	204038	130° 53' 55"	33° 20' 13"	20140820 ～ 20141125	1,349㎡	記録保存 調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
君迫遺跡	集落	中世	掘立柱建物4棟 土坑1基 溝状遺構3条	土師質土器 青磁 石器	中世の集落、祭祀等に 利用された非日常的な 空間の可能性がある。
山ノ神（二串） 遺跡	集落	弥生 古墳	土坑2基 溝状遺構4条	弥生土器 土師器・須恵器 石器・鉄製品	水路として利用された 溝状遺構から弥生土器・ 土師器・須恵器などが 出土。土坑からは祭祀 に使用された古墳時代 前期の土師器が出土。

要約	<p>君迫遺跡は、君迫川によって形成された谷部左岸の段丘面上にあり、調査地付近の標高は約95～96mを測る。調査では、谷状の地形を埋め立て、掘立柱建物を建てた15世紀から16世紀にかけての集落が確認された。この集落については、遺物量が極端に少ない点などから、通常の集落とは考えにくく、祭祀などを行う非日常的な空間であった可能性が高い。</p> <p>山ノ神（二串）遺跡は、二串川右岸の沖積面に広がり、調査地付近の標高は約77.0～77.5mを測る。調査では、弥生時代中期末から古墳時代後期まで水路として利用された溝状遺構や古墳時代前期の土坑などが確認された。溝状遺構からの出土土器は摩耗していたことから流れ込みが想定され、さらに周辺地形の状況から、今回の調査地付近は西側から東側へ向かって集落、水路、水田、二串川という、現在とほぼ同じ景観であったと考えられる。</p>
----	--

朝日の遺跡Ⅳ

君迫遺跡・山ノ神(二串)遺跡の調査

2017年2月28日

編 集 日田市教育庁文化財保護課
〒877-8601 大分県日田市田島2丁目6-1
発 行 日田市教育委員会
〒877-8601 大分県日田市田島2丁目6-1
印 刷 山本印刷工業有限公司
〒877-0059 大分県日田市大日町3986-3